

座頭乞食の手引き小僧ラサリージョ・デ・トルメス 波瀾万丈、嵐の生涯

作者 不詳

翻訳・訳注 萩内勝之

解説と翻訳（その2）

今回は東京経済大学人文自然論集第128号に掲載した。今回は作品を成す全7章から第一、二、三章を訳出し、作品全体に応じる解説を付けたが、与えられた頁数のつごうで、脚注を施さず、脚注に代え訳文に説明的要素を加味した。

今回は全章（第一章から第七章まで）を訳し、各章に脚注を施したので、前回の本文訳に織り込んだ説明的要素は除いた。よって、第一、二、三章は前回とは大きく異なる訳になった。

本試訳は前回でも述べたが、声を出しての朗読、もしくは、劇場での独り語りを念頭に置いたので、黙読者には句読点が目障りになったり、語呂が邪魔になるかもしれない。意図をお察しのうえ語容赦ねがう。

翻訳に用いた原典のこと、参考文献のことは、本稿が単行本となって刊行されるときに付加する。

作品の題名訳は、今回は『ラサリージョ・デ・トルメス 波瀾万丈、嵐の生涯』としたが、今回は『座頭乞食の手引き小僧ラサリージョ・デ・トルメス 波瀾万丈、嵐の生涯』とした。

序

世間の噂には、噂にすぎず、事實は、見た者も聞いた者も、いないことが多くございます。ゆえに、わたくしは、事實を世間に知らすべし、と存じるものであります。事實を、忘却という墓にもれさせてはなりません。書いておくべきであります。書いておけば、人に読まれ、嗜好にかなうとか、さなくも、面白いではないか、と迎えられることもあるからであります。いにしへのプリニウス先生も宣っております。

「悪書といえど、とりえが皆無ということはない」

また、人の好みが一様でないことを、世間では、

「主様の我楽多、あたいの宝」

などと申します。さればこそ、目に余るものでないかぎり、なにごととも葬り去ってはなりません。害にならず、どこか為になるところがあれば、書いて、広く知らせるべき、と心得るのであります。広く、と申しますのは、本というものは、だれか一人にむけて書くものではないからであります。とはいえ、苦もなく書けるものにもあらず、見返りを期待いたしますが、銭カネを出せと申すではありません。見て、読んで、褒めるところがあれば褒めてもらいたい、と願うのであります。いにしへのキケロ先生の宣うて妙であります。

「名誉が芸術を育てる」

ちなみに、兵士が、敵の城壁にハシゴを懸け、先をあらそってのぼるのは、生きていたくないからでありましょうか。とんでもないことにございます。褒められたいの一心で、命を懸けるのであります。絵も文もしかり、褒められたいの一心からかくのであります。

師範格の説教師がみごとな説教をたれたといたしまししょう。衆生の魂に救いあれ、と願う御仁であります。そこで、

「狛下は説教の達人であらせられます」

とお褒め申しあげたら、御気分にはさわるでありましょうか。

あるとき、さる高名の騎士が、武芸試合でぶざまな負け方をなさいました。それでも、お供の道化が、

「槍のおさばきが、お美事であらせられました」

とお褒めもうしたところ、騎士は、鎧の下の綿入れをぬいで、道化にとらせたとか。もしも、槍のおさばきが、真実、「お美事」であったとすれば、騎士は何をもって報いたでありましょう。

さればこそ、これにしたためましたるは、人に秀でて筆がたつなど、毫もほこれぬ、駄文ではありますが、ご一読をたまわり、いささかなりともお気にめすならば、なんで悪い気がいたしまししょう。あわせて、わたくしのように、波瀾万丈をわたってきた者のあることも、

お胸のどこかにおとめおきくだされば、過分の果報とぞんじます。

お届けいたします一筆は、望みと器量がつりあっていればと、心苦しくはございますが、拙ければ、拙いがまま、ご笑納たまわりますようお願い奉ります。

さて、あの一件、つまびらかに書いてよこせ、と書いておよこしあそばしたれば、これに書いてお届けいたすものにございます。つきましては、ことの次第を、途中からではなく、そもそもの起こりから書く所存であります。ここに、そのわけをもうし上げます。一つは、わたくしめの生涯の道筋をお胸におとめおきあそばされたいからであります。そうして、もう一つ顧慮したまわいたきは、やんごとない身分のお世継ぎであらせられましようとも、そのご身分の濫觴らんしょうをかえりみたまえば、ご一身の功労の賜物とはかぎらず、めぐりあわせの、授かりものであるということであります。あわせて、そのいっぽうに、万里の波濤を、逆運にめげず一身の奮闘と才覚でござわたり、風の港にたどりついた者のあることもおくみとりたまわれば恐悦至極にぞんじます¹⁾。

第一章 ラサロが生涯を語るだれの子か²⁾。

何はともあれ、先ずは姓名からもうし上げます。わたくしこと、姓名の儀は、ラサロ・デ・トルメスであります。父は名がトメ、姓がゴンサーレス、すなわち、トメ・ゴンサーレスと申します。母は名がアントーナ、姓がペレス、すなわち、アントーナ・ペレスと申します。いずれも、サラマンカ市の在所テハーレスの生まれにございます³⁾。わたくしは、トルメス川で産湯をつかったことから、姓を父から継がず、川からとってトルメスをなのっておりますが、その事情をつまびらかに申しあげます。父は、すでに身罷っておりますが、川っぶちの水車で粉挽き番を十五年以上もつとめておりました。ある晩のこと、身重の母が急に産気づきまして、水車の中へ、ぼちゃんと、わたくしを産みおとしたのであります。それゆえわたくしは、正真正銘、川で生まれたと申せるわけであります⁴⁾。

あれは八つの餓鬼のころ、親父が、御上からお咎めを頂戴いたしました。血抜きなりわいの罪をおかしたとの廉にございます。生業が粉ひきでありますから、小麦がパンパンにつまった南京袋が小屋へ運びこまれてまいります。その中身を、瀉血師が血を抜くように抜きとったというのであります⁵⁾。荒療治がすぎて抜きすぎたか、お縄をうたれ、御白州で白をきらず、黒と吐き、神妙にお裁きをうけて、所払いとなりました。その父も、いまごろは天国に召されているであります。盗人が天に召されるなど虫がよすぎる、とお思いであります。そうともかぎらないのであります。

「裁きによって追われし者に天国の至福あり」

とは福音書のマタイののたまうところでもあります⁶⁾。おりしも海軍が艦隊を編成しておりま

した。敵は海のむこうのイスラム、モーロ軍であります。所払いをくらった父は、その足でそれにくわったのであります⁷⁾。任務は、戦地へむかうさる騎士の、騾馬をひく荷役でありましたが⁸⁾、忠勤をはげみ、閣下のおそばを片時もはなれず、往生をも共にいたしましたのであります。

そんなわけで、亭主に先立たれたお袋は、寄る辺ない身の細腕で、羽振りのいい大樹にすがるうと市中に移りすみましてございます。そこで、あばら屋をかりて、学生さんの三度のもののお世話をさせてもらったり⁹⁾、教会の、アルカンタラ騎士団のマグダレナ教会であります¹⁰⁾、その団長様の馬丁の汚れ物を洗わせてもらったりしたのであります。それで既に出入りするうちに¹¹⁾男ができました、肌の黒いのができましてございます¹²⁾。団長様の馬丁で、それが我が家にやってきては夜明けに消えておりました。昼日中にくることもありました。卵を分けてくれんかね、とかなんとかを口実にしてあらわれていたのであります¹³⁾、わたくしは、そいつが嫌いでした。はじめのうちはおっかなくて、それはもう、色が色であります、それに人相も人相でありましたから、恐うございましたよ。ところが、日がたつうちに、おや、と気がついたのであります、この男が出入りするようになってから我が家の食べ物がよくっている、と。日増しに良くなっておりましたので、これはいい人ではないか、となって、大好きになりました。手土産にパン、それに、肉ももってきてくれました。冬は薪であります。おかげで母と子が凍えずに冬をすごせました。

やがて足がしげくなり、一夜一夜がふえて、ちんちんかかもが重なるうちに、お袋が、これをあげるとばかり、ちっこい黒ちゃんを作ってくれたのであります。そいつが、めんこくてめんこくて、高い高いをしたり、一緒におねんねしたり、それはそれはかわいかりました。そう、こんなこともありました、わたくしには義理の仲の父親であります、黒い親父が実の子をあやしていたとき、この餓鬼が申したのであります。お袋の顔とわたくしの顔と、父親の真っ黒い顔を見くらべて、実の父親をゆびさして、

「おっかあ、こわい、お化け」

と言ったのであります。父親は、

「よくいうよ、売女の子のくせして」

そういつて大笑いしましたが、お化け、にはわたくしも子供ながらにかんがえさせられました。「人が人を嫌うのは自分が見えないからだ」

そのうち我が家の運がかたむきました。義理の父は、サイデともうしますが、そのサイデとお袋の仲が騎士団の穀物担当の執事の耳に入ってご沙汰となりました¹⁴⁾。馬にやる大麦の二割五分をネコババしていたのであります。それに、やはり馬に食わせるふすま たきぎ麩、薪、馬の垢をおとす鉄のタワシや雑巾や、鞍の下にしく綿布に、これも馬の背にかける、毛布や敷布などを、どれも、なくなった、ということにしておりました。めぼしいものが尽きてからは、馬の足にも手をのばしました。蹄鉄をはがすことまでやってのけたのであります。そういうも

のをお袋のもとにもってきては、弟を養ったのであります。奴隷にしてこれだけのことをやってのけたのでありますから、坊様や修道士様ならなおのこと、たとえ、坊様が、貧乏人から、なにやかやを巻きあげても、また修道士様が、修道院のものを横に流してでも、信心深く慕いよるご婦人方を手厚くお世話なさいますことに、誰が文句をもうしましょう¹⁵⁾。ほかにもあれこれサイドの仕業が明るみにでました。わたくしが吐いてしまったからであります。あれこれ訊かれて、痛い目にあいたいかな、などと脅されもして、餓鬼のことですから、こわくて吐いたのであります。サイドが剥がしてもってきた蹄鉄を、お袋の言いつけで、鍛冶屋へさばきに行ったことまで、問われるまま、すらすら申し上げたのであります。それで気の毒に義父は百叩きにあいました。その生傷の上へ豚の脂の煮えたのをたらす脂責めにもあいました。お袋は宗旨の違う男と情を交わした廉で、これも百叩きにあい、くわえて、向後は騎士団の団長様のお屋敷への出入りを禁じる、鞭打たれたサイドを、家にむかえ入れることも罷りならん、と言ひ渡されたのであります¹⁶⁾。

お袋は、釣瓶を落としても縄は投げな、の教えをまもりました。歯を食いしばって、お裁きにたえたのであります。やがてサイドとのあいだの厄介をさげ、近所合壁の白い眼からものがれるために、旅館の住み込女中になりました。日向屋ソラーナであります¹⁷⁾。そこでもお袋の苦労はたえませんでした。弟が立って歩いて、あっしが一丁前の小僧になるまで育ててくれました。あっしは、客の注文する酒や燭台を運んだり、いろいろ手伝えるまでになっておりました。

そのころであります、泊まり客に盲目の座頭の乞食がおりまして、これが、あっしを見込んで、この子をくれんか、とお袋に、さようで、手引き小僧にしたいと申したのであります。お袋は、おまかせいたしますと申しました。そのうえで、この子の父親は先のジェルバ島の大戦で信仰に殉じた偉い人でありますから¹⁸⁾、神かけて、その子が親に劣るはずはございません、くれぐれもおろそかにしていただきますな、天涯孤独になるのですから、と念をおしました。

そこで座頭が、おおせのとおりにいたします、手引き小僧に雇うのではありませんぞ、実の子として頂戴いたします、と請け合いまして、わたくしは、その年老いた座頭乞食の手引きをつとめることになりました。これが、わたくしの初めての親方であります¹⁹⁾。それから何日か、この親方についてサラマンカの町を物乞いして回りましたが、親方は、水揚げがばつとしなかったからか、サラマンカに見切りをつけました。よそに行くことにしたのであります。その日、お袋に暇をつけにいったとき、二人で一つ涙に濡れてから、お袋はこう申しました。

「おまえと会うのは、もうこれっきりでしょう。一廉の人になるんですよ。神のお導きがあるよう祈っています。ここまで育てて立派な親方につけてやりました。これからは、自分のことは自分でするんですよ」

それから、待たせていた親方とともにサラマンカを出ていったのでありますが、町外れの橋のたもとに石造りの像がありました。牛のような形をした獣の像であります。そこで座頭が、「ラサロ、牛のそばへ寄れ」と申しました²⁰⁾。

「牛に耳を当ててみろ、奥から大きい音がする」

というのであります。わたくしは無邪気に信じました。それで、頭を石に近づけますと、それを感じとった座頭は、手であっしの頭を石に押しやりました。がつんと石に頭突きを入れさせたのであります。三日は痛うございました。

「愚か者。座頭の手引き小僧というものは、悪魔よりも目端がきかなければつとまらんぞ」

座頭はこういって自分の冗談を得意げに笑いました。わたくしはそのとき目が覚めました。それまでは、ねんねであったのです。

「この人の言う通りだ。この人はおいらの目をあけてくれた。自分の面倒は自分でみよといってる」

われわれの旅はこうして始まりました。そのうち、乞食のもちいる符丁というのをおそわりました。座頭はおいらを呑み込みがいいと見て、満足げにこう申しました。

「おぬしには、銭はやれないが、世間を渡る知恵はたっぷりと付けてやる」

実際そうになりました。わたくしに命を授けてくれたのはまずは天主様であります。つぎはこの座頭という主人であります。目が見えない身でありながら、手を引く小僧のおいらの行く手を照らし、手をとって導いてくれたのであります。

餓鬼のころの他愛ないあれこれを並べますのは、低きにあっても高きをめざすのが尊いのであって、高きから低きに落ちるに身をまかせては尊くないからであります²¹⁾。

話を座頭に戻しましょう。この盲人であります。神が造りたもうたもので、これほど狡猾いやつはおりません。稼業の乞食にかけては、まるで鷲のようにそびえておりました。祈祷は百以上も誦んじていて、低音できかせました²²⁾。どっしりと迫る声が教会中にひびきわたりました。面立ちはいとも温厚で、信心深げにみえ、実に優しげな顔をしておりました。同業の乞食には、祈りながら大袈裟な身振り手振りで表情をつくる者が多いのでありますが、そんなことをしなくても銭をよびよせる手練手管を具えていたのであります²³⁾。祈祷はさまざまにとり揃えて効能ごとにつかい分けておりました。子宝に恵まれないご婦人方にはこれ、安産にはこっち、夫婦仲を円満にしたいと願う妻には、夫をその気にさせるこれ、と取っておきを用意しているのであります。妊婦には、和子であります。姫君ですぞと予言もいたします。医術にかけては、虫歯、卒中、子袋の痞えのことなど、ギリシャのガレヌス先生とて自分の半分も知らないと豪語しておりました。とにかく、伺いをたててくる者には、

「それにはこうしなさい、これこれの草を煎じなさい、なににないの根を飲みなさい」

と当意即妙に答えるのであります。行列ができました。並ぶのはたいていが御婦人です。御婦人は先生の言うところを何でも信じますから、これをいいカモにして荒稼ぎをいたしま

した。百人の座頭がよって一年で稼ぐ分を先生は一人で稼ぎました。

しかしながら、これもご承知置きねがいます、それほど稼いで溜めこんでいながら、これほどの吝嗇の我利我利亡者をわたくしは他に知りません。おかげでわたくしはずっと飢え死に寸前でありましたし、当人も、人が食っておくべき量の半分も食っていませんでした。大袈裟でも何でもありません。わたくしなど、飢え死にさせられそうになったことが何度あったかしのれないのであります。が、それでも、わたくしはそのたび、知恵と細工で凌ぎました。座頭が盗まれまいと頭をつかって用心しても、わたくしがその裏をかいて、たいていと言ってよいでありましょう、だし抜いておりました。賢くだまくらかしたわけではありますが、その手口の幾つかをもうし上げましょう、どれもが無傷ですんだわけではありませんが。

先生は、パンはもちろん、一切合財を麻の頭陀袋に入れてもち歩いていました。口を鉄の輪でしめるやつです。いちいち錠をかけては鍵であけておりました。出し入れするとき、それはそれは用心深く、何が何個入っているかは、羊を数えるときのように慎重でありました。そばからパンくず一つ、ちよろまかすこともできないほどでありました。おいらは、そこから、ほんの雀の涙ほどを恵んでもらっておりました。二口で消えます。先生はこれを取り出したあと、錠をかけるのでありますが、まさかおいらがちよろまかす隙をねらっているとは思っておりません。注意をおこたっております。おいらはそこをつくのであります。袋の縫い目の一部を、何度もほどいたり縫いもどしたりしました。そこから血抜きをほどこすためであります²⁴⁾。量り売りのように小出しにするのではありません。かけらではなくて、大きい、かたまりで抜いておりました。豚の脂身の揚げたのや腸詰めも抜きました。ちよいちよいやりましたが、ちよろまかす隙をねらっていたというより、座頭めのせいで空いた腹の、その隙間をうめる隙を虎視眈々とうかがっていたのであります。

銭は、かすめたりちよろまかしたりしたのを、全部、半小粒²⁵⁾に替えてためておりました。祈祷をひきうけると、前金で小粒がとんできますが、座頭めは、目が見えず、投げ銭に気づきませんから、飛んでくる小粒をおいらが口でぱくっと受けとめて、口の中に用意してあった半小粒とすり替えてわたすんであります。座頭めがどんなに素早く手を出しても、小粒は、おいらの口という両替屋で正価の半分に減じております²⁶⁾。そりゃあ、小粒でないことは、さわれればわかりますから、奴はぼやきました。

「おぬしが来てからというもの、もらえるのは半小粒ばかりだ。小粒も、マラベディ銭もしょっちゅう出たのにどうしたことか、おぬし、貧乏神を連れてきたな」

あいつは祈祷をはしよることがありました。半分もいかないのにやめるのであります。祈祷を頼んだ人がたちさったら、すぐ頭巾の端をひけ、と申しましたので、ひきますと、ご祈祷うけたまわり、ご祈祷各種、うけたまわります、と改めて声をあげるのであります。

ものを食うときは、いつも、ワインの徳利を手元にひき寄せておりました。わたくしは、それをそおとつかんで、そおと、音をたてず、二口ばかりすすっては戻しておりました

が、それは長続きしませんでした。減り方でわかるのであります。それから、徳利を目の届くところに置くようになりました。手でつかんで放さなくなったのであります。それでもおいらには、強力な磁石にもまさる手管がのこっていました。麦藁を用意いたします。大麦の長い藁です。これを徳利の口につっこんで吸ったのであります。やっこさんは輦棧敷におります。しかし敵はタヌキでありまして、その場は気づかぬふりをして作戦を変えました。徳利を股座にはさむという作戦であります。そのうえ口を片手で塞いで、もう安心、と飲んだのであります。

おいらはそのころもう、酒の味を覚えておりましたから、飲みたくて、うずうずしておりました。しかし、麦藁はもうつかえません。そこで、徳利の底に小さい噴き出し口をつくりました。針で刺したほどの穴を穿ったのであります。そこに蠟の粒を薄く延ばして、栓をいたしました。そうしておいて、いっしょに食事をするときは、ささやかに焚いていた火に近寄りふりをして座頭めの股座に潜り込むのであります。そのうち、火のぬくもりで蠟が、薄くしてありますから溶けます。溶ければ中の酒がしたたり落ち、おいらが口で受けるのであります。一滴たりとも受けそこねはありません。おいぼれが飲もうとすると、徳利はとっくに空っぽであります。ややっ、とやつめは仰天しましたが、わけがわかりませんから、やい、徳利め、酒をどうした、わしのワインをと八つ当たりするばかりでありました。

「おいらじゃありませんよ、おいらが飲んだなんて、人聞きの悪いことはいわないでくださいよ。手でつかんで東の間も放さなかったじゃありませんか」

やつは徳利をぐるぐる回して、なでたりさすったりいたしまして、じつは、そのうち、酒の噴き出し口をみつけるに至っておりました。だまされていたことに気づいたわけでありませう。ところが、そこはタヌキでありますから、知らぬふりをきめこんでおりましたので、おいらは、あくる日も同じように徳利から酒がしたたる仕掛けをつかったのであります。やつが気づいていて、罠を仕掛けているなど思いもありません。例のごとく股座にもぐりこみまして、天を仰ぎ、うっすらと目を閉じて²⁷⁾、甘露のしたたりを噛みしめていたのであります。と、そのとき、やつが、両手で徳利をふりあげ、そいつを、おいらの口めがけて、力一杯、甘露の酒も苦くなれとばかり打ちおろしました。復讐のときをうかがっていたわけでありまして、ありったけの力で、目にもみせてくれる、とうちおろしたのであります。うわの空で悦楽にひたっていたラサロの運命やいかに。それまでと変わらぬ能天気の上に、天が、天上の、もろもろのものともろともに、ドカンと落ちてきたような、まことにもってそのような気がいたしましてございます。

あれはこたえました。くらくらっとなって、そのまま気を失いました。後で聞いたのでありますが、徳利が砕けて、顔に破片が刺さっていたそうであります。顔中が傷だらけでありました。歯も折れました。わたくしは、それっきり、今日にいたるまで歯が無いのであります。わたくしは、そのときから、やつを嫌いになって、憎むようにもなりました。目にかけ

てくれたし、楽しいこともあったし、傷の手当もしてくれましたが、わたくしは気づいたの
 であります、こいつはおいらをいじめて、おのれの憂さをはらしている、と。酒の徳利のか
 けらでできた傷を酒であらってくれましたが、そのとき、にたにたしながらこう申しました。

「おぬし、どうおもう。おぬしは酒にいやしくて怪我をしたが、その怪我をいやしてくれ
 るのも酒だ²⁸⁾」

そういつて、さらに穿ったことをならべましたが、おいらには面白くありませんでした。
 腫れが少しひいて瘡が薄れてきたころ、おいらは考えました、こんなことがあと何度かつづ
 いたら、やつはおいらを厄介払いにするだろう。それならば、先手をうってこっちから切っ
 てやる、と思ったのであります。しかし、急いてはことをし損じる、でありますから、潮時
 をまちました。じつは、腹はたつが、我慢して徳利の一件も水に流してやろう、と思わぬこ
 ともなかったのであります。座頭めのひどい仕打ちがやまなかったもので、水に流すことは
 できませんでした。わけもなく頭をぶったり髪の毛をひきぬいたりしたので、生傷が絶えま
 せん。なぜそのように小僧をいじめるのか、と人にきかれると、きまって徳利の一件をもち
 出しました。

「こいつを、無邪気な小僧とお思いでしょうが、悪魔も顔負けの大悪党でありますぞ」
 そうきくと、みんな桑原桑原と十字をきって口々に、

「この小僧さんがそれほどの悪党とは、見掛けによりませんな」

と、そういつて、徳利の仕掛けにあきれて笑いながら、

「そんなワルなら、もっともっと懲らしめておやりなさい、そのほうが神の思し召しにか
 ないます」

人がそう言ってくれるのをいいことに、寝ても覚めても折檻をするようになりました。そ
 れからというもの、おいらは、やつの手を引いて歩くとき、わざと、歩きにくいところを選
 びました。ころんで怪我をしそうなところを歩いたのであります。石ころだらけのところ
 があれば、^{つまず}躓くようにそこを歩かせます。^{ぬかるみ}泥濘であれば、うんと深そうなところをいかせるわ
 けであります。おいらは乾いたところをいったかという、そうじゃありません。目の無
 い敵に片目をとらせて両目をとることにしたのであります。やつはおいらの頭のうしろに杖
 の先をおしつけて歩いたのであります。なにやかにつけ、こつんこつんと頭をぶつもの
 ですから、いつも瘤だらけでした。髪の毛はひっぱられて抜けてしまいました。悪い道をえ
 らんで歩かせているのではありませんよ、いい道がないからです、と申しまして、聴き入
 れません。勘がよかったのです。やつの勘の鋭さを、ずばり物語るべきごとを、数ある中か
 ら一つお話いたします。一つで充分におわかりいただけるからであります。

サラマンカを出てからはトレドに向かうことにしておりました。トレドには金持ちが多い
 からといい、人に施す段になると締め屋ではあるが、とも申ししておりました。それでも、
 素寒貧より締め屋のほうがまし、という諺に望みをたくして、財布の紐のゆるみそうな村

をたどっていきました。そんな村では逗留の日をふやし、ゆるみそうにない村は三日でおさらばのサン・ファンにいたしました²⁹⁾。

ある日アルモロスという村に入りました。酒処であります。折から葡萄の収穫の真っ最中でありました。摘んでいた人が一房めぐんでくれたのでありますが、熟れきっているうえに、畑で籠にいれるときに手荒に扱われたのでありましよう、さわるとばらけてしまいます。それを袋につめようとしたら汁がにじみでて、まわりのものも、ぎとぎとになりそうでしたので、やつは急に、小僧、贅沢をさせてやる、と気前のいいところを見せました。ぎとぎとが袋の中の物におよんではまずいと思ったのと、ひとつには、おいらの機嫌をとるためでもありました。その日はあっしを何度も蹴りとばしたり叩いたりしていたのであります。

「きょうは二人で贅沢をするぞ。このぶどう一房を山分けだ。取る粒の数は同じとする。取り方はこうだ。おぬしが一回取る、わしが一回、一回に一粒、いいな。粒がなくなるまで、おぬしがつまむ、わしがつまむ、おぬしがつまむ、わしがつまむ。そうすれば誤摩化せん」

こうとり決めてつまみ始めましたが、敵はすぐに二回目から方針を変えて二粒ずつとり始めました。わたくしのほうも二粒ずつとるに違いないと思ったんであります。わたくしは、そっちがその気ならこっちも、と二粒ずつ、そうして、先手をいって三粒ずつ、やがて、とり放題にとると房はなくなって軸だけが残ったのでありますが、その軸を手に、敵は首をかしげました。

「ラサロ、おぬし、ごまかしたな。三粒ずつ食ったであろう。わしの目は節穴ではないぞ」
「だましていませんよ。何を証拠に」

とあっしは白をきりましたが、敵は、見えない目で見通しておりました。

「三粒ずつ食ったことがなんでわかるか知りたいか。わしが二粒ずつ食ったのに、おぬしは黙っていた」

胸の内であつてしまいました。目が見えないのに、よくぞそこまで、と子供ながらに舌を巻いたのであります。

ことほどさように、この、最初のご主人様とは、愉快的なことがいろいろありました。忘れられない話も山ほどありますが、くどくなりますので、ひとつ、大切りの一件をご披露いたします。二人はこれをもって切れました。

あれは、エスカローナでのことであります。エスカローナ公爵の御領地のあの町で³⁰⁾、さる宿に逗留していたときのことであります³¹⁾。座頭から豚の腸詰め細いのを一本渡されました。焼き串に刺せ、ということであります。やつはそれまでにその腸詰目を焙って、滲み出た脂をパンにぬって食っておりました。いっしょに半小粒³²⁾も渡されました。ワインを買ってこいということでありますが、そのときわたくしに魔がさしました。盗みをはたらくのにお詠えの場であったのです。時が盗人をつくると申しますが、燕が一個、暖炉の火の横に転がっていた時であります。チビでやせ細ってみすばらしい燕でした。鍋に入れてもらえず捨

てられたのでありましょう。その時そこにいたのは座頭とおいらの二人きりでありました。そのわたくしは、それまでに腸詰めをあぶるにおいをたっぷり嗅いでおりますから、食いつ気が貪欲であります。その時はその欲を満たすことしか頭にありません。あとにどんな恐ろしいことがまちかまえているか、そんなことを考える余裕はなかったのです。わたくしは座頭が銭を取り出す一瞬の隙に申から腸詰めをぬきとって、かわりに蕪を刺したのであります。座頭はこれでワインを買ってこいと銭をよこし、行火^{あんか}をひきよせて掻きまぜました。蕪を、欠陥品であったがゆえに鍋に送られるのを免れていた蕪を焼くためであります。おいらはワインを買いに走りました。それで、ワインと腸詰めを腹へ旅立たせてからもどったとき、やつは蕪をパンにはさんだままもっていました。まだ手でさわっていなかったので、すり替えられていることには気づいていませんでしたが、そのとき、腸詰めの一部もいっしょに齧るつもりでパンを口にやって、顔を^{しか}顰めました。冷たかったからであります。その場で癩癩玉が破裂しました。

「やい、ラサリージョ、これは何だ」

「やだな、なんでもラサロのセイにされたらセがちぢみますよ、もっとヤセロとおっしゃるんですか。ワインのお使いからもどったばかりじゃありませんか。誰かがきて、いたずらしていったにきまっています」

「いや、焼き申はずっともっていた。だれもワルサはできん」

わたくしは白を切り通しました。すり替えには関わっていないと言い張ったのであります。効き目はありませんでした。目界がないのに抜け目がなくて、だませないのであります。やつは、立ち上がって、おいらの頭を一掴みにして鼻をすりよせてきました。そうして、獵犬みたいにクンクンやって、何かを嗅ぎとったらしく、匂いのもとを確かめずにはおくものかと、おいらを両手でかかえこみまして、手加減も容赦もあったものか、口をこじ開けて、遠慮会釈もなく鼻をつっこんできました。鋭くとがった長い鼻であります。しかも、そのときは、昂奮して、太く、そそり立っておりまして、手の平ほども伸びて、さきっぱがおいらの喉ちんこを突きました。怖い恐ろしいの、しかも、あれよあれよの間のことでありますから、腸詰めやつ、運の悪いことにまだ腹に納まっておりませんでした。大事件はそれからであります。巨大な鼻が押し入って、わたくしは息が詰まりそうになりましたが、そのとき、上からの鼻と下の腸詰が出会いました。それで、盗み食いがばれて、腸詰が持ち主にもどることになりました。すなわち、やつが鼻をひっこめるまでに、あっしの腹の虫がびっくり仰天して腸詰を吐きだしたのであります。噛み砕きがたりていない腸詰と、やつが鼻が、そろって飛びだすことになったという次第であります。

神様、あのときあっしは死んでも同然でありました。墓へ送ってくださればよかったのであります。座頭めはかんかんになって怒りました。騒ぎをきいて人がかけつけてきましたが、きていなければ、やつは、おいらを生かしてはおかなかったであります。かけよった連

中が、やつの手からわたくしを助けてくれましたが、その手は髪を、おいらの、なけなしの毛をごっそりつかんでおりました。顔も首筋も爪でひっかかれました。喉もやられました。喉は、因果応報であります。飲み食いの意地がまねいた災難なのであります。座頭めは、集まってくる人みんなに、わたくしの災難の説明をいたしました。さかのぼって徳利のことも、葡萄の房のことも、その場の一件もくりかえしてしゃべって、みんなの笑いをとりました。通りがかりのだれもが足をとめて野次馬にくわったのであります。やつが、わたくしの悪事をつぎつぎしゃべったのであります。洒落や軽口をまぜたのが面白可笑しくて、あっしも、ついつい、むごい折檻で泣かされているにもかかわらず、笑わないと悪いような気になりました。やつがべらべらしゃべっているあいだじゅう、あっしは悔みました、自分が不甲斐ないばかりに、やつを鼻をもぎとらなかったことを悔んだのであります。今だ、という瞬間がありました。ほとんど獲れていたのであります。あのとき、ひと思いに噛み切っていれば鼻はこっちのものになっていたのであります。鼻の持ち主には目界がひらかれておりません。ゆえに、腸詰めではドジをふんだ腹も、やつを鼻なら確保していたであります。やつが、鼻をもがれたと訴え出ても、証拠の鼻は出頭しませんからお咎めをうける心配はなかったのであります。とどのつまり、獲っていても獲らなくてもご沙汰にはならなかったのであります。噛み切っておくべきであったのです。そのほうが、神もきっとお喜びになったであります。

宿の女将とその場の連中のとりなしで、わたくしと座頭は仲直りいたしました。やつは、わたくしが買って来たばかりのワインで顔と喉の傷を洗ってくれたのであります。そのあいだも、ずっと、わたくしの喉にまつわるあれこれを面白おかしくネタにして軽口をとばしておりました。

「わしが二年がかりで飲む酒を、この小僧めは一年で傷を洗うのに使ったんでありますぞ。やい、ラサロ、おぬしが今日あるはお酒様のおかげと思え。父親など、一度きり、おぬしを作ったに過ぎんのだから、恩に着ることはないが、おぬしはお酒様のお陰で千回もよみがえったのだ、ご恩を忘れるでないぞ」

それから、わたくしの頭を何度かち割ったの、顔を何度ひっ搔いたのと、数えあげては、そのたび酒で洗ったら、たちどころに治ったと申しました。

「世の中、広しと言えど、酒で出世する者がいるとすれば、おぬし一人だろうよ」

こう言って、傷を洗っていた連中を笑わせておりました。わたくしはむかつきましたが、予言は外れておりません。的中であります。あれからこちら、あの人のことを思い出しては、たしかに予言の才能があったとおもうのであります。その人に、わたくしは非道い仕打ちをいたしました。借りを返したまで、とはいえ、あの日あの人の言ったことが、いまお話ししますが、そのとおりになったことをおもうと気の毒になります。

それにしても、そこまでからかわれ馬鹿にされては我慢がなりません。あっしはそのとき

やつを捨てる決心をかためました。ずっと考えていたことでありまして、そのつもりでおりましたので、その場のあまりの仕打ちに腹をくくったのであります。あくる日のこと、二人でお貰いの街回りをしましたが、前の晩が土砂降りであくる日の昼間もふっておりました。それでも街の中のひさしのある玄関から玄関へと祈禱をあげまわりました。ぬれはしませんでしたが、宵がせまってからも雨がやみそうにないので、やつがこう申しました。

「この雨はやまんぞ。暗くなってからよけいに降ってきやがった。ひどくならんうちに宿へもどろう」

宿へもどるにはちょっとした小川を越えることになりましたが、そこが、雨で増水しておりましたので、あっしは、

「川は幅がずいぶん広がっているので、ひとつ跳びで越せそうなところを探してまいります。あっちのほうは幅が狭くなっているので跳びこせそうです。足が水につかることはありません」

やつはこの助け舟にのってきました。

「やっぱりきみは偉い。だから大好きなんだよ。流れのせまいところへ連れていってくれたまえ。なにしろ冬だからぬれたら体にさわる。足が水浸しになったらよけいにこたえる」

思う壺にはまってきたのであります。そこで、玄関から広場の中へつれていきました。まわりに石の柱がずらっと立っていますね。家の庇を支えているあれであります、その石の柱の一本の、真ん前にやつを立たせておいて、あっしはこう申しました。

「おじさん、ここが一番狭いよ」

雨はいっそう激しく降っておりました。気の毒に、やつは濡れネズミであります。二人とも、その土砂降りからのがれるのに必死でありました。それで、これが決定的でありました。さすがのやつも悟性のまなこが眩んだようであります。神があっしに復讐のときを授け給うたのであります。

やつはあっしのいうことを真にうけました。そこで、

「まっすぐのところに立たせてくれ。跳ぶのはきみが先だ」

あっしは石の柱の真っ正面にやつを立たせておいて、先に跳んで、柱のうしろへまわりましました。広場にはなたれた闘牛の突進をまちうけるのと同じ格好であります。

「さあ、こい。うんとこどっこい、ひとつ跳びで、こっちだ」

あっしがいい終わらないうちに、かわいそうに、座頭めは、弾みをつけるために一步しりぞいて、ぴよんと、山羊みたいに跳ねるや、^{まっしぐら}驀地、頭から柱にぶつかったのであります。カボチャがつぶれるような音がして、のけぞりました。頭が割れて死んだようでありました。

「どうした、腸詰めめの匂いはかけても、柱の匂いは嗅げなかったか。嗅げ、嗅げ、オ・レー³³⁾」

わたくしは、駆けつけてきた連中の人集りにやつを置いてきぼりにしました。大門をぬけ

て、高飛びで、ずらかったのであります。日が暮れるまでにトリーホスに着いておりました³⁴⁾。やつがどうなったか、その後のことは全く知りません。知ろうとしたこともありません。

第二章 ラサ口は坊様に仕える。それからのこと。

あくる日、トリーホスでは安心できないのでマケダという町へうつりました³⁵⁾。そこでお貰いをしていると、これまた因果なことでありますが、坊様が声をかけてきて、ミサのお仕えができるか、とおききになったのであります。わたくしは、できます、と答えました。ほんとうに心得があったからです。

座頭めにはひどい目にあわされましたが、役に立つこともいろいろ教わりました。ミサの作法³⁶⁾もその一つでありまして、坊様は、そうかい、それはよかった、とわたくしを雇ってくれることになりました。

ところが、これが食わせ物でありました。鳴る神のゴロゴロからのがれたつもりが稲妻のピカドンの中へ飛びこんだのであります³⁷⁾。座頭は我利我利亡者ではありましたが、この坊主に較べたらはるかに気前がよく、アレクサンドロ大王並みでありました。坊主は、けちけち大明神と申して過言ではないのでありますが、そのしみつたれが、生まれついでのしみつたれか、それとも袈裟や衣を纏っているうちに染み付いたしみつたれか³⁸⁾、そのところはわたくしには測りかねます。

坊主は、うちに古びた長持ちをそなえておりまして、いつも鍵をかけて、その鍵を、両端に金具のついた紐にゆわえて、衣の上っ張りにつけておりました。教会から供え物のパンのお裾分けが届きますと³⁹⁾、そこへしまい込んで自分の手で鍵をかけておりました。ほかに食べ物、家中、どこにもありませんでした。たいていの家には塩をした豚が高いところで燻しにかけられているとか⁴⁰⁾、切りさしのチーズが俎板にのっているとか、水屋にパンの食べ残しが三切れ四切れは入っているものです。そういうものがあれば、盗み食いはしなくても見るだけで慰められるというものであります。ただ、タマネギはありました。数珠つなぎにしたのが天井裏の物置の鍵のかかったところに置いてありました。あっしの分は四日に一個で、いちいち鍵をかりるのでありますが、そばに人がいると胸の隠しへ手をやって、えらく勿体をつけて、鍵を紐からはずしてあっしに渡しながらこう言うのであります。

「はい、鍵をもっていきなさい。すぐに返すのですよ。道草を食わず、ごちそうを食べるだけにしなさい」

まるで鍵のむこうに豊かなバレンシア中の甘いお菓子⁴¹⁾が全部そろっているかの口ぶりでありました。実際は物置には、今も申しましたように、タマネギが一本の釘にぶらさげであるだけなのであります。それもきちんと数がかぞえてあって、出来心にも割り当て以上を食っ

たりするとたいそうな割りを食います。そんなわけで、わたくしは空きっ腹をかかえて生死の境をさまよっておりました。

わたくしには薄く、我が身には厚いやつでした。坊主は、毎日、昼と夜あわせて、肉に、大枚、小粒五枚をつかいました⁴²⁾。汁物は分けてくれましたが、肉となるとあっちを向いて自分だけで食い、パンをちょっとくれるだけでした。腹半分にならばまだましであります、そこまでもいきません。土地では土曜日には羊の頭を食しておりました⁴³⁾、三マラベディの頭を一個買いに行かされました。坊主はそれを煮て、目玉と舌と、首まわりと脳味噌と、顎にくっついている肉を食いました。あっしには齧ったあとの骨をくれました。骨を皿にのせてこう申しました。

「食বেনさい。豪勢に食べて天下をおとりなさい。法王様よりいい身分です」

「きみが代わってそうすればいい」

あっしは胸で呟きました。

坊主のもとで三週間が過ぎたころに、腹がへって立ってられないくらい弱ってしまいました。そのまま神の御手が届かず、わたくしが才覚を働かせていなければ、まっすぐ墓場へ行ったであります。それが目に見えておりました。

それにしても、せっかくの技も、敵に隙がなくては活かせません。この坊主にはつけいる隙というのがありませんでした。ほんのわずかな隙ができたとしても、今度の敵は目を眩ますことができません。先の敵は、やつがあのまま、かぼちゃの頭突きでくたばったのであれば、神よ、お許しを、であります、あの座頭は、たしかに抜け目のないやつではありましたが、目という、掛け替えのない感覚が欠けておりましたので、あっしが何をしているか、それは掴みきれておりませんでした。それにくらべて、今度の敵は、あれほど鋭い目は他に知りません。ミサでは、わたくしが皿を捧げて餐錢を集めて回ります。パンや葡萄酒にあてる浄財の奉獻であります、そのとき入ってくる小粒銀を、やつがみのがすことは絶対にあります。一方の目で人を見て、他方であっしの手を見ているのであります。ド頭の中で目玉が水銀みたいに、コロコロ、ころがるのであります。

わたくしは、やつのもとでは、生きながらの死に体で暮らしたのであります、そのあいだに、小粒を手にするほど結構な身分を味わった覚えはこれっぽっちもありません。居酒屋へ葡萄酒を買いにいかにされても、小粒がいるほどは求めません。葡萄酒は、たいい信者のそなえたお神酒のうちの、僅かばかりをもちかえって、長持ちに納めておりました。それを、秤で計るように小出しにして、一週間はもたせておりましたが、その吝嗇ぶりを、人にはさとられまいとして、こう申ししておりました。

「いいですか、聖職者の飲み食いは節度を旨とします。拙僧はそこいらへんの坊主とはちがいます。度を過ごすということがありません」

この口癖とは裏腹に猫をかぶっていました。やつは、信者の寄り合いや法事に出て経をあ

げたあとのお齋ときのときは、狼でありました、むさぼり食ったのであります⁴⁴⁾。飲むほうは、うわばみ蟒蛇のごとく飲みました⁴⁵⁾。法事と申しますのは、これについては、まず神のお許しを願うといたしまして、わたくしは人の生き死にのことで自然の寿命にさからう者ではないのであります、とにかく、法事があれば食えました。満腹になりました。でありますから、あのころばかりは、一日一人は殺させ給え、神よ、と願いました。そして祈りました。臨終間近の病人に油を塗る、終油の秘跡のとき、坊様が、まわりの縁者に、別れのお祈りを、と誘いますが、そのときばかりは、わたくし、人に遅れをとったことはありません。心底から善かれとおもって祈りました。ふつうなら、主よ、この者を然るべきところへ配らせ給え、というところを、わたくしは、この世から連れ去りさせ給え、と祈ったのであります。たまに逃げ戻ってくるやつがいると、神様には悪うございますが、くたばり損ないぬ、と呪いました。すんなりくたばってくれる者には、冥福の祈りの数を、倍に増やしてさしあげました。坊主のもとにいたほぼ六ヶ月に身罷ったのは、たったの二十人でありますが、どちら様もみな、わたくしが殺したと申しますか、わたくしの願いが通じてみまかったと申せるであります。神は生死の境を往ったり還たりするわたくしを、無惨や、見るに忍びん、生かしてやる、代わりにあの者たちを殺そうと思し召したのであります。とは申しましても、その日その日のまに合うほど進捗（はか）がいくわけではないので弱りました。墓に死人を埋める日は、あっしが生きのびて、死人のない日はあっしが、いつものように空きっ腹をかかえることとなります。満腹を何度か知っておりますから、その分、辛さが倍になります。つまりとところ、死んでしまわないかぎり、安らぎはないのであります、よそさまのことを、死ね、と願っていた者が、わが身も死ね、と願うに至ることもありました。ところが、いつも同居していたはずの死神が、そんな時には居ないのであります。こんなところにはもう居られない、出て行こうと幾度も考えましたが、そのうち考えなくなりました。理由は二つであります。一つは、足がいうことをきくか、という心配であります。空きっ腹続きでありますから、足は萎えきっております。もう一つは、よく考えて我が身に言いきかせておりました。

「おぬし、主人はこれで二人目だ。先の主人のもとでは飢えて死にそうだった。だから別れてこいつと一緒にになったが、こんどは墓穴に足を突っ込んでいる。そこで、こいつを見限ったとして、次がもっと下だと、死ぬぞ、それしかない」

それで、にっちもさっちもいかなかったのであります。「階段を昇った方がいいが⁴⁶⁾、暮らしは下がっている。声がこれよりもか細く下がったら、ラサロよ、おぬしがどう叫ぼうと誰にも届かんぞ」

敬虔なキリスト信徒を分け隔てなく救いたまう神に、これ以上は悩まなくてすむようにしさせ給えと祈るほど悩んでおりました。いい知恵もうかばないまま、状態は日増しに悪くなっていたわけではありますが、そんなある日、この、しみったれの、どけちの、しわん坊が、用があつて村の外へでかけていきました。

その留守中のことであります。金物の鋳掛け屋が門に立ちました。それが、あのときのわたくしには天使に見えました。これは、神の御手が鋳掛け屋職人の姿をさせてつかわされたのだ。鋳掛け直しの御用はありませんか、ときかれてわたくしは申しました。

「ありますとも。おおあります。いい塩梅にできたら感謝感激です」

そう言いましたが、声がか細くてきこえなかったようです。ところが、まだ感謝の言葉をならべて喜んでいるときではない、と悟ったとたんに、聖霊の照明をあびて⁴⁷⁾、わたくしはこう申しました。

「おじさん、長持ちの鍵をなくして困っています。ご主人様から鞭でうたれます。お手持ちの鍵で合うのがあったら、お代は、ちゃんと、わたくしが払います」

こう申しますと、天からつかわされた鋳掛け屋は、長い紐に数珠つなぎにした鍵を一つ一つためしてくれました。そばから、わたくしも手伝いました。か細い声ではありましたが、一心に祈ることで手伝ったのであります。と、まさかのことがおきました。長持ちの中に、話にきいていた通りの、パンの御姿をした、「神様のお顔」、が在りましたのであります⁴⁸⁾。蓋をとってからわたくしは鋳掛け屋にもうしました。

「じつは、お金はないのです。中にあるものでお取りください」

天の使いの鋳掛け屋はパンを一個、一番よさそうなをつかんでから、はい、鍵、とわたしてくれて、恵比須顔で去っていきましたが、わたくしの顔はもっとほくほくであったでしょう。ただし、長持ちの中味には手をつけませんでした。気づかれないように用心したのと、それだけの財産が我が物になると、余裕というものができまして、ひもじい、ということとは縁がきれてしまうのであります。ひもじさを感じないのであります。

やがて、ご主人のけちん坊がご帰宅あそばしましたが、神のお計らいで、お布施に貰ってきた布袋様が、一個、欠けていることには気づきませんでした。

あくる日、布袋様を安置した天国の扉をあけて、一個を、押し戴き、歯と歯のあいだにお連れして、「信じます」という使徒信条を二度称えるほどの短いあいだに⁴⁹⁾ 腹の中へお送りいたしました。腸詰めするときとはちがって、影も形も残さないよう念をいれました。もちろん、長持ちを開けっぱなしにしておくなどのドジは踏みません。それから、家の中を大掃除いたしました。貧乏神をはきだしているような、ルンルン気分でありました。その日と明るく日は、ほくほく顔で過ごしましたが、それが、三日天下でありました。三日目に三日熱の本番におそわれたのであります⁵⁰⁾。わたくしの人生は楽が似合わないようになっていたのであります。我が物としてせしめていたはずの長持ちに、やつが、わたくしを飢え死に寸前においやっていた張本人が、おもいがけずそこに陣取って、中味を、とっては返し、返してはとって、数えては、また数え、そしてまた数えなおしていたのであります。わたくしは空とぼけをきめました。秘密の祈祷のなかであれやこれやの経をととなえ、願をかけました。

「御聖人様、ファン様⁵¹⁾、こいつを盲いさせたまえ」

ととなえたのであります。

やつは、日数とパンの数をながながと指を折って数えてから申しました。

「用心の仕甲斐がありました。おこたっていたら、だれかがパンを盗んだのではと疑ったでしょう。それにしても、これからはもっと丁寧に数えます。いまあるのは九個と一切れです」

わたくしは胸でさげびました。

「神よ、世にも稀なる鉄槌をこいつに下させたまえ」

やつの、用心用心という言葉がこたえました。太い矢に射抜かれた思いでありました。腹は、以前の空きっ腹に戻るのか、と火がついたように苛立っておりましてので、せめて目の保養にと、長持ちを開け、パンと対面しておがみました。おそれおおくて口にやれなかったのであります。けちけち坊が数えちがえをしていればいいのにと、数えなおしましたが、残念ながら違えてはおりませんでした。そのときあっしにできたのは、パン様に二度三度と口づけをするのと、パンを切り口にそって、できるかぎり薄く削ぐことでした。削ぎ落とした分をその日の糧としたのであります。前の日のような浮いた気分にはほど遠く、鬨り殺しに遭うおもいでありました。腹は、それまでの二三日で満腹を憶えておりましたから、隙き間が増すと、ますます苛立ちました。一人の時は、長持ちを開けては閉め、閉めては開けて、子供が神様のお顔とよぶパン様の顔を拝んでおりました。と、そのうち、神様はやはり弱者の味方であらせられました。飢え死に寸前のわたくしを見るに見かねて、ちょっとした知恵を授け給うたのであります。

「この長持ちは、老いぼれて、朽ちて、スカスカで穴ボコだらけだから、鼠が入りこんで、パンに害をおよぼすこともあるだろう。しかし、まるまる一個をひっぱりだすと怪しまれる。おいらを無い無いづくしにしているやつのことだから、パンが足りないとすぐに気づくにちがない。だが、しかし、いくらやつでも、鼠がかじる程度なら気づくまい」

そう考えて、そのへんにあった檻褌布をしいて、そこへパンをそぎ落としました。四個から、それぞれ鼻糞ほどを削いで、金平糖風に丸めては口に入れたのでありますが、その場しのぎの慰めにすぎませんでした。

やがて、昼を食うため、やつが帰ってきて、長持ちをあけて、パンを手にとって、目方が減っていることに気づきました。それで、鼠の仕業と勘ぐったのであります。長持ちの状態から、鼠のやりそうなことと見て、角から角まで調べました。すると、穴がいくつか見つかりましたので、鼠にちがない、と合点がいったのであります。

「ラサロ君、我が家のパンが、ゆうべ、大変な迫害にあいましたぞ」

やつがこう言ったので、あっしは、それは大変、とおどろいてみせて、何者の仕業でしょう、と惚けました。

「何者といって、鼠ですよ。鼠公は人の鼻毛までひいていきます」

それから一緒に昼を食ったのでありますが、ありがたいことに、この場でも事は順調にはこびました。パンをいつもより多めに食わせてくれたのであります。鼠がかじったとみた部分をナイフで切りとってあっしの分にくわえてくれたからであります。

「これもいただいておきなさい。なあに、鼠公というのは清潔な生き物ですよ」

そんなわけで、その日は、この手で稼いだした分、と申しますか、爪で削り落として丸めた分も余計に食して、和気あいあいと昼をすませたのでありますが、わたくしとしては、食べ始めが食べ終りではありました。

それから、これにも驚きました。慌てました。やつが、こまめに探して壁の釘を抜いて回ったからであります。さらに、板切れも探してきまして、それでもって、よたっている長持ちの穴を塞いで、釘でうちつけたのであります。

「何たることを、主よ。現世の衆生の貧しさは何処に尽きるのでありましょう。逆運の苛みはいつ果てるのでありましょう。苦界にさく快樂（けらく）の花は、あまりにも儂のごぞいます。つたなくも気恥ずかしい手口ながら、これをもって貧苦と手を切る手がうてたと手をうち叩いておりましたのに、糠喜びでありました。運命は逆しまに、わたくしの慢心の奢りを善しとせず、どうひねくっても、知恵など出そうにない、ド吝嗇のド頭に知恵をお授けになったのであります。不運逆運は、いまや長持ちの穴を塞ぐことで、わたくしの安堵の門を閉ざし、苦難への扉を開け放ったのであります」

わたくしは腹で叫びましたが、その嘆きをよそに、こまめな大工となったやつめは釘と板をせっせとさがしてきて、工事を完成させたのであります。

「鼠小僧諸君、料簡を入れ替えるときが来ました。当家では家尻切りの盗人に仕事はさせません」

言いおいて出ていったあと、わたくしが、この目で工事の仕上がりを検分いたしましたところ、老いぼれの、くたばり損ないの長持ちなのに蚊一匹もぐりこめそうな穴もみつきりませんでした。それでも、未練がましく、無役になった鍵で長持ちをあげ、パンの二つ三つから、鼠がかじったとおもわせたところを、剣術の達人のように薄く微妙にかすめとりました。必要は発明の母。窮すれば通じると申しますから、窮することには事欠かないわたくしは、夜も昼もなく、生き延びる術を考えました。空腹が母でありました。才知は、腹が空いているときに牙え、満ち足りているときには鈍る、と申します。わたくしの場合がそれでありました。

ある晩、長持ちを思いどおりこちらのものにするには如何なる方法があるか。横になってそれを考えておりますと、ご主人様のいびき駢のガーゴー・ガーゴーの往復がきこえてきました。そこで、あっしは、そっと起き上がりました。じつは、昼間から目論んで、ちびて細くなった小刀を、暗くてもとれるところに用意していたのであります。そこで、長持ちのそばへ忍びよりまして、ここが手薄と昼間から目星を付けていたところを、錐でさすように、ずずつ

と一突きにいたしました。相手は老いぼれであります。ポンコツの虫食いだらけの長持ちでありますから、抵抗する体力気力のあらばこそ、へなへなとその場で観念をいたしました。なされるがままであります。あっしに身をまかせて、穴を一発抜かせたのであります。あとは余裕であります。満身創痕の長持ちの蓋をあけて、手探りでパンを、さっきもうしました、けずりさしをとりだして、これをもう一削りいたしました。それで空いた腹をだましてから長持ちの蓋を閉じて藁の寝床に横になり、うつらうつらいたしました。寝付けません。腹が空いていたのであります。それはそうでしょう。もっとも、フランスの国王様などは、囚われの身を憂えて、まんじりともしなかつたそうであります⁵²⁾、そんな大層な憂いで臉が合わないなんてことは、わたくしの身には、まかり間違ってもおきません。明るる日、ご主人様は被害に気づいて、パンが減っている、穴があいている、鼠だ、とわめきました。

「当家に鼠がいたことはありません。急に湧いて出てきました」

まことにその通りであります。この国で鼠公への貢ぎをめんじられている家があるとすれば、先ずあそこでしょう。鼠公は食べ物のないところには住みません。糞坊主は改めて家中の壁を探りました。釘と板を見つけては長持ちの穴を、今度こそはと、しっかりふさぐためです。夜、やつが寝入ればあっしの出番になります。やつが昼間にふさいだ穴を、あっしが小道具をつかって全部あけるのであります。ふさげば剥がし、剥がせばふさぎます。イタチごっこであります。「閉まる戸があれば開く戸がある」のであります。

夫の帰還を待つペネローペが機を織っては解くのを⁵³⁾二人が入れ替わり立ち替わりして真似たのであります。昼間、やつが織る機を、夜、あっしが解き、やつがまた織るとまた解く。それを繰り返しておりますと、昼夜をいくつもへないうちに、本来は食べ物を入れておく箱であったものが、釘やら鉋やらで覆われて、武者の鎧の成れの果てにも見紛う、まことに無惨な姿とあいになりました。

この方法では効き目がない。やがて、やつは、それに気づいて、こう申しました。

「この長持ちは、長く生きてあがらうすべもない老体を犯されました。どんなにひ弱な鼠にもかないません。長くは持たない長持ちですから、頼りにしたらもっと酷い目にあうかもしれませんが、いまのところ無くては困ります。お払い箱にしていい齢ですが、替わりを新調したら三、四リアルはかかります。鼠小僧にはこれまでの方法は効きませんから、新しい手を使いましょう。鼠を長持ちの中で退治できる武器です」

やつはそうやって鼠捕りをかりてきて、中に、近所から貰ってきたチーズの皮をとりつけました。猫が長持ちの中で武装してまち構えるようなものですが、あっしにとってはありがたいことでした。空きっ腹が続いていたので、ものを食うのに味付けなどいらないからであります。チーズの皮だけで結構な御馳走でありました。とはいえ、パンの鼠食いをやめたわけではありません。

そんなわけで、パンは相変わらず鼠小僧に齧られ、チーズは食われたわけでありますから、

ご近所の衆にきいていました。チーズを食べたり引いて出たりしているのに罠に掛からず、中にもいなくて、罠が落ちているのが腑に落ちません、と忌々しげにかこったのであります。

近所の衆は口をそろえて申しました。

「それは鼠の仕業ではありませんよ、鼠なら一度くらいは罠にかかります」

また一人が申しました。

「お宅ではよく蛇が這い回っていました。犯人は、きっとあの蛇です。胴が長いので、よろよろと入って、ばくっとやったんですよ、罠が落ちても身長があるから全部は入っていないので、よろよろと後戻りができます」

この話に、だれもが、ありそうなことだと納得し、ご主人様は顔色を変えて、それからはぐっすりと眠れなくなりました。木蠹虫きくいむしが夜中にガリゴリやるのを、蛇が長持ちを齧っていると思うようになりまして、起き上がって、蛇を追っ払うつもりで長持ちを棍棒で滅多打ちにいたしました。賊を蛇と思い込んでからは枕元に棍棒をそなえたのであります。

この騒ぎでご近所も目が覚めました。あっしも寝てはおれません。やつはあっしの寝ている藁の寝床へも来て藁をひっくり返しました。中に入っているあっしも転がすのであります。蛇があっしを狙って藁とか着ているものとかに潜り込んでいると思ったのです。ご近所が、蛇は、夜になると温もりのあるところを探す習性がある、赤ん坊の寝床などに潜り込んで、齧ったり食い殺したりすると言ったからであります。

わたくしは、たいてい寝た振りをいたしました。夜が明けるとやつはこう申しました。

「ゆうべは騒々しくありませんでしたか。わたしが蛇をおいまわしたんですよ。蛇は、そのうち、おまえの寝床へも来るでしょう。体が冷えるので温もりを欲しがるのです」

わたくしは、とぼけてこう言いました。

「牝蛇にかじられちゃうなんて、ほく、やだよ、こわい」

そんなわけで、やつが呪いにかかったように、目が冴えて横になることもしなかったので、蛇は、ふつうなら牝蛇ですが、そのときの蛇は、誓って牡蛇でありました⁵⁴⁾、その牡蛇は、もはや、夜中に長持ちをさすり回ったり馬乗りになったりする根性はありませんでした。

しかし、これは夜のことで、昼のうちは、ご主人様が教会に出かけているとか、在所に向いておりましたので、襲撃を敢行いたしました。かくして被害はやまず、打つ手もきかず、やつは夜になると、今も申しましたが、悪霊のごとく、家中をかきまわるようになりました。わたくしとしては、そのように執念深く見張られては鍵がバレル、見つかってしまうと心配です。そこで寝床の藁⁵⁵⁾の中にかくしていたのを、寝ている間は口の中におさめておくことにいたしました。そこが一番安全と思ったからであります。盲目の座頭と一緒に暮らしていたころは口を財布代わりにしておりました。銭を十二や十五マラベディ、それくらいはみな半小粒にして口に入れっぱなしにしておりましたが、ものを食うときも邪魔にはなりません。小粒を座頭にさとられずにしまっておける場所は口の中だけでありました。やつ

は縫い目も繕い目も隅々まで頻繁に点検しておりました。

そういう事情で、わたくしは、毎晩、鍵を口に入れておりました。おかげで、悪魔の目を持つご主人様も気づくまいと安心してねむれたのでありますが、不幸というやつに見込まれたらどんな手だても無駄であります。宿命か、おそらく罪業ゆえでありましょう、ある晩、眠っているあいだに、すったりはいたりしていた息が、開きっぱなしの口から鍵の筒を抜けて音を発していたのであります⁵⁶⁾。笛がヒュー・ヒューと鳴って、わたくしの悲劇の幕がひらきました。鋭い音でご主人様はびっくり仰天しました。てっきり蛇の吐く息だとおもったのであります。もっともなことであります。

ご主人様は起き上がって棍棒を手探りで音のするほうへ、抜き足差し足、蛇に気取られないよう忍び足で、近寄ってきました。蛇がそこにいる、あっしの寝ている藁の中にいる、温もりを求めて潜り込んでいると思ったのであります。そこで棍棒を思いっきり高く振り上げました。そうして、真下の蛇を殴り殺す勢いで力一杯振り下ろしたのであります。あっしの頭があるところでありました。それはそれは、強烈な一撃でありました。あっしは気を失いました。頭は割れました。ぎゃあと、あっしが悲鳴をあげたのでありましょう、やつはその声であっしと知りました。みんなあとでやつから聞いた話ですが、そばで喚き声をあげ、名を呼んで意識をもどそうとして、触ったらひどく血が出ていたので、あっしであったと知ったのです。大急ぎで取ってきた灯りのもとでみると、あっしがぜいぜい呻いていて、その口が鍵をくわえていました。死んでもはなさんぞ、とばかり銜えていたそうです。半分がはみ出していて笛のように吹いていたときのままであったようです。これはどうしたことだ。蛇狩りは不思議におもってそのものを口から引っぱり出しました。と、鍵であったわけで、切り込み具合を調べると、長持ちの鍵と寸分も変わらないので、試したところがぴったりで、わたくしの悪事も明るみに出たわけでありました。

「当家を襲って財産を食物にした鼠小僧と牝蛇の正体を見破りましたぞ」

蛇狩り男は憎々しげにこう言ったとか。

それからの三日間については、はっきり申し上げられることは何もありません。つまり、わたくしは鯨の腹の中にいたのであります。今申し上げたことも、それ以上のことも、意識が戻ってから、ご主人様から聞かされたことです。やつは、来る人来る人に長々と事細かに事情を聞かせました。三日後に意識が戻りましたが、そのときわたくしは藁の上に寝ておりました。頭は包帯でぐるぐる巻きで、油薬と膏薬が滲んで、ぎとぎとでした。

「どうしたんですか」

何かあったと感じてそう聞くと、坊様は冷たくこう言いました。

「長持ちを台無しにしてくれた鼠小僧どもを、一網打尽にしました。正体を見破りました」

それからみんなして、わたくしのことを、ああなっていた、こうなっていたとしゃべくって大笑いしました。わたくしはひとり小さくなって泣くばかりでしたが、それでも食物は

食わしてくれました。食わせてくれたとはいっても、腹ぺこでしたから満腹の半分にも足りませんが、それから二週間後には起きて立ってもう大丈夫となりました。腹のほうは大丈夫にはほど遠くて、元気も半分というところではありました。

あくる日、立って歩けるようになったとき、ご主人様はわたくしの手を引いて、戸口から外へつれだして、そこで、

「ラサロ、きょうから、きみはきみのものですよ。拙僧のものではありません。誰かに雇ってもらいなさい。きみのように知恵のついた小僧はわたしのそばには要らないのです。座頭乞食の手引き小僧をしていたでしょう、そうとしか思えません」

そういって、あっしにむかって、憑き物がついているかのように十字を切ってから、うちへ入ってパターンと戸をしめました。

第三章 ラサロは盾持ちの下男になる⁵⁷⁾。それからのこと。

そんなわけで、衰弱した我が身から元気をふり絞り、世間様にお縋りしながら、ようよう、これなる大都トレドにたどり着きました。ありがたいことに傷は二週間ほどで固まりましたが、痛々しく見えた頃は布施^{ほどこ}しをもらうのに途切れ目がなかったのに、怪我が癒えるや、口々にこうおっしゃるようになりました。

「おまえさん、物貰いだね。乞食は御法度だよ⁵⁸⁾。誰かにやとってもらいなさい⁵⁹⁾」

あっしは胸で呟きました。

「世界をつくった神様が新規蒔き直しでもしてくれないかぎり、誰がおいらを雇ってくれる」

しかたなく、戸口から戸口へとお貰いを続けましたが、物の足しになるほどは貰えませんでした。人に施そうという慈悲の心が天国へ疎開していたのであります。そんなとき、ありがたいことに神が、あっしに、お武家をひとり差しむけたまいました。身なりが身分と釣り合って申し分なく、髪は梳きたて、歩く姿に威風がみなぎっています。そのお武家が、ちらっとわたくしに一瞥をくれ給うたそのとき、わたくしも、ちらっで目と目が合ったのでございます。と、

「奉公先をさがしているのか」

お声がかかりました。

「さがし求めております」

申しますと、

「ついて参れ。拙者と出会うとは、運がついている。ツキを呼ぶ経など唱えたな」

二つ返事でお供いたしました。人品骨柄卑しからず、出で立ちも凛々。わたくしが求めていたお人であります。

これが三人目のご主人に当たるわけですが、出会ったのは朝のうちで、うしろにつ

いて街中を歩きました。広場の露天市も通りました。パンをはじめ食べ物をいろいろ売っているところですから、てっきり、何かお買い求めになった物をおいらが担っていくんだ、折から買い物どき、ぜひそうさせてもらおうと張りきりました⁶⁰。ところが、殿様はそこを素通りあそばしたのであります。

「そうか、このあたりではお気に召すものがないので、先でお買いになる、そうなんだ」

そう察して歩き続けるうちに時計が十一時を打ちましたが、殿様は、すたっすたっ歩みあそばして、やがて大聖堂へお入りになりました。わたくしもお供して入ったのでありますが、殿様が、感謝のミサなどの神事をいともうやうやしくお聴きあそばすのをわたくしは見ておりました⁶¹。全部が終わってみんなが立ち去るまでずうっとであります。それから二人で教会を出たのでありますが、殿様が、改めてすたすたずんずん先をお歩きになるので、わたくしも嬉しくて足取りが軽くなりました。「そうだ、これからは、毎度毎度食べ物をさがし求めて汲々としなくていいんだ、このご主人様はまとめ買いのおかただから、食事はとっくに出来ているんだ、おいらの望みが叶ったのだ、そうだと、そうでなくては困るじゃないか」

そう思っているうちに、時計が午後の一時をうったのでありますが、そのとき、とある一軒の戸口で歩みをおやめになりました。それで、わたくしも、ならって歩みをやめると、殿様は合羽マントの端を左にからげて、袖から鍵を取り出し、戸をあけて、そろって家へ入りました。中は暗くて陰気でした。背筋がぞっと寒くなりましたが、中庭がひろがっていて、まわりに、そこそこの部屋が並んでいました。部屋に入りますと、殿様は合羽⁶²をぬいで、手はきれいだろうな⁶³、とおききになりました。それから、二人して合羽のあっちとこっちをささえ持って、ばたばたと埃を払い落としました。それから折り畳んで、造り付けの石のベンチ⁶⁴に、まず、そこに息を吹きかけて埃を飛ばしてから⁶⁵合羽を置きました。そうしてその横に腰をかけてからであります、いずこより参った、生国は、して、トレドへは何用で、などと事細かにお聞きあそばしたのであります。わたくしはそんなことより、食卓の用意をせよ、とか、鍋⁶⁶のものをよそえ、とか言ってくれりゃいいのにと思いましたが、それとは裏腹に聞かれるまま長々としゃべりました。あれもできる、これもできる、と嘘をこねあげて自分を売り込んだのであります。都合の悪いことは伏せておきました。じつは、上品な勤めは苦手だとわかっていたからであります、そうこうするうちに、なんだかおかしいぞ、と感じてきました。

そろそろ二時なのに、殿様は、死人でもあるまいに、まったく食い気を見せないのです。それと、入り口の戸をしめてしっかりと鍵をしたのも気になりました。家は上の階でも下の階でも足音一つせず、人の住む気配がありません。部屋中を見回しても壁ばかりで、腰掛けなど影すらなく、丸太の椅子も、木の長椅子も、机もないのです。先のご主人様のところには長持ちがありましたが、そんなものもなく、まるで魔法にかかった家のようなであります。

した。

と、お声がかかりました。

「小僧、昼は」

「まだいただいておりません。お会いしたときは八時にもなっていなかったのです」

「そうであったな。我輩は朝の早いうちに昼を済ませた。朝のうちに昼を食しておく、晩までもつ。我輩の体はそのようにできているのだ。我慢してつきあえ。晩は一緒に食そう」

わたくしは目の前がくらくらとなりました。腹がへっていたこともあります、どこまでもついていないと思われ知らされたからであります。それまでの、受難の日々が思い出されて泣けてきました。坊主のところから逃げ出そうとしていたときに、こいつはどうしようもない吝嗇ではあるが、よそへ行ったらもっとひどいことになるぞ、と我が身に言い聞かせていたことを思い出したのであります。それまでの辛苦を思っては泣き、このままでは先が短いと心細くなっては泣いたのであります。それでもどうにかこうにか泣き顔を見せずにこうもうしました。

「殿様、わたくしは若いので、ありがたいことに、たいして食べなくても平気です。口が卑しくないことでは同業のあいだでも自慢にできるほどでありまして、これまでにお仕えしたご主人のどなたからも褒められてまいりました」

「それは立派だ。きみのそこが気に入った。ますます好きになりそうだ。腹一杯食うのは豚だ。健康な人間は口に節度がある」

「おまえさん、ばれてるんだよ」あっしは腹でつぶやきました。「健康法や節度で腹の虫がおさまるものか。先のご主人様と同じ穴のむじなだ」

さようにかこちつつ、戸口に身をよせて、懐からパンの切れっ端を二つ三つ取り出しました⁶⁷⁾。乞食をして蓄えていたのです。これを見てやつがもうしました。

「こっちへ来い。何を食っている」

パンを見せると、一切れ、一番上等の大きいのをひつつかみました。

「これはうまそうだ、このパン」

「昼をお済ましになっているのに、うまそうに見えるのでありますか」

「うまそうだ。どこで手に入れた。清潔な手でこねたものだろうな⁶⁸⁾」

「それは存じませんが、食べて吐き出したくなる味ではありません」

「それはありがたい」

そう言うと、もう恥も外聞もないご主人様は、パンを口へやるなり獣のようにむさぼりました。あっしもそういたしました。やつは、

「最高だ、美味だ、たまらん」

といました。あっしはやつの弱みを知っていたので、急いで食いました。やつは自分の分を食ったら、こっちの手元を狙って、頼まれなくても手伝いにきそうだったので、食い終

える時を合わせたのであります。やつは胸のあたりのパン屑を、粉がほんの少しついているだけなのに、穢れを落とすかのように払って⁶⁹⁾、隣の寝部屋から壺を取ってきました。口が壊れていて、どちらから見ても新しくはありません。そこから自分が一口飲んで、わたくしにもすすめました。わたくしは酒に卑しくない風をよそおうために、

「酒はたしなみません」

と申しました。すると、

「水だ、気にせず飲め」

と言うので、壺を取って飲みました⁷⁰⁾。ぐいぐいとはやりません。水でうるおう乾きではないからであります。

それから晩までそこで過ごしまして、そのあいだにご主人様はわたくしのことを根掘り葉掘りおききになりましたので、わたくしは、精一杯、元がばれないよう、そつなく答えました。それから、殿様はあっしを壺のあった部屋へとおして、こうおっしゃいました。

「小僧、おまえはそっちへ回れ。寝床のつくりかたを教える。今後はおまえの仕事だ、おぼえておけ」

言われるままそっちに立ち、殿様がこっちに立って、二人して寝台をつくりました。不細工な寝床であります。つくるといってもたいした手間ではありません。背もたれのない長椅子が二丁ありまして、これをあっちとこっちに置いて、上に簧の子をのせるだけです。簧の子には綿の詰まった布がかぶさっていました。敷き布団なのですが、そうは見えません。毛綿は入っているものの、しかるべき量に達していないうえに、久しく洗っていないので、こっちこちなのであります。それを柔らかくしようと広げるのであります。骨折り損であります。いったんこっちこちに固まったものは柔らかくならないのであります。まるで驢馬の背におく敷き布でありまして、それが内側に恐ろしいものを隠しております。簧の子の上のせますと、竹の一本一本が突き出てくるのであります。やせた豚の背骨のようなものです⁷¹⁾。その空きっ腹の敷き布団の上に、同類の、空きっ腹で汚れっぱなしでこっちこちの毛布をかけるのであります。もとが何色であるかははっきりしません⁷²⁾。寝床ができて夜になってから殿様がこう申されました。

「ラサロ、夜もふけてきたし、外で食うにも広場は遠い。それに、街では泥棒がうようよしている。夜更けには追い剥ぎが出る。物騒だから、今夜は、我慢しよう。朝になれば神のご慈悲に縋れる。みどもは一人暮らしであるゆえ食べ物も蓄えていなくて、このごろは外食ばかりだが、今後はあらためる。家で食うとしよう」

「殿様、わたくしのことなら、お気遣いは無用でございます。やむをえないのであれば、一晩といわず二晩でも三晩でも食べなくて平気です」

こう申しますと、殿様は、

「いま以上に健やかになるということだ。先ほど来申しているように、長生きの秘訣で小

食にまさるものはない」

と申されました。あっしは腹でつぶやきました。

「小食で長生きが出来るのなら、おいらは不死身だ。好き好んで、ではないけれど、小食を守り通している。これから先も死ぬまで守りとおすことになりそうだ」

殿様は寝台で横におなり遊ばしました。ズボンと胴衣は枕元に置いて、わたくしには、足下へ入ってこいと申されましたので、その通りにいたしました。なかなか寝付けません。わたくしのガリガリの五体の骨と簀子の骨が鑊をけずって火花を散らしていたからであります。艱難辛苦を空っぽの腹で支えてきたあっしの五体には肉が一ポンドもついていなかったうえに、その日もほとんど何も食しておりませんでしたから、腹が食う食うと騒ぎます。腹の皮がゆるめば、目蓋は突っ張ります。あっしは神様には悪うございますが、我が身を呪いました。お授け下さった不運を一晩中怨みました。なお悪いことに、寝返りをうてば殿様を起こすことになるので打てませんので、どうか死なせ給えと幾度も神に祈りました。

朝は同時に起きました。殿様はズボン、胴衣、上着⁷³⁾、マントの順に叩いたりゆすったりして埃を落としました。わたくしは、お手伝いであります。殿様はお気のむくまま余裕綽々とお召し物をお付けあそばしました。わたくしはお手水をさし上げます。御髪の手入れはご自分でなさいます。それから腰の剣帯に剣をお吊りあそばしたのでありますが、そのとき、

「これなる一振りがいかなる業物か、そのほうには分かるまいが、金貨をいかほど積まれても替える気のしない名剣だ。名匠アントニオの業物⁷⁴⁾とて、この一振りには及ばん」

かく宣いまして、おもむろに鞆を払い、刃に指をあてて、

「見よ。この刃でふわふわの毛綿をすばっと切って見せれば納得がいくはず」

あっしは腹でつぶやきました。

「おいらの歯は鋼づくりじゃあないけれど、四ポンドもあるパンだって噛み切って見せませずせ」

殿様は剣を鞆におさめ腰におびて、そこに数珠をお吊りになりました。珠は特大であります⁷⁵⁾。その格好でミサに詣でるのであります。背筋をしゃきっと伸ばし、頭と胴体を粹にしならせて悠々と歩を進めるのであります。マントの端を肩にやり、ときには腕にやって、右の手は腰にあて、そのお姿でお出かけになるのであります。

「ラサロ、我輩はミサに詣でる⁷⁶⁾。留守をまかせる。寝床を調べてから川へ水をくみに行け。瓶をもってな。川は坂をくだったところだ。扉は泥棒がはいらないよう嚴重に鍵をかけるんだぞ。鍵は框のここのところに置いておけ。我輩がいつ戻ってもすぐに入れるように、よいな」

こう言いおいて広場のほうへ向かったのでありますが、その姿の粹なこと。何も知らない者が見たら、あれに行くはさぞや高名の、もしかしたらアルコス伯爵⁷⁷⁾の縁者かとおもわんばかり、少なくともどこかの公爵の近習には見えます。

「主よ、栄えあれ」

あっしは腹で呟きました。

「人に病を授け癒しをも授け給う主よ。あのご満悦な闊歩を見るかぎり、このお人が昨夜はさぞご馳走をめし上がったであろう、さぞかしふかふかの御寝具でご就寝あそばしたであろうと思うばかりか、いまだ朝にして、すでにしっかりと昼食をおすましになっている、と合点しない者がいるでありますでしょうか。主よ、あなた様は途方もない秘め事の作り手であられます。人には知り得ない謎ばかりお作りになります。あのマントと上着のもっともらしい風采にだまされない者がおられますか。あの紳士が、じつは、きのう一日なにも食していないなど誰が想像するであります。家来のラサロが、懐という長持ちに入れて、一昼夜、持ち歩いたパンの一切れだけがその日の糧であったなどと誰がおもうであります。そのパンとて世辞にも清潔とはいえない代物でありました。手も顔も洗いはいたしましたが、手拭いをもちあわせず、上着の裾で間に合わせたことなど、誰も知るよしはないのであります。主よ、この手合いを世に広くはびこらせ給う主よ、この手合いは名誉や体面と称する七面倒にとらわれ、凝り固まって、あなた様のために尽くすなどの苦労は何一つ為すことがないのであります」

そんなことを胸で呟きながら、玄関に立って殿様を見送りました。細い路地をとおざかっていったのであります。わたくしはそれから家へ入り、急いで隅から隅まで一階も二階も、なに一つ見落とさないよう検分して歩きましたが、目にとまるものは何一つありませんでした。それから寢床を、はい、忌ま忌ましいこちこちの布団で寢床をつくって、水瓶をかかえて川へ行ったのであります。河原で殿様を見かけました。道端の野菜畑で女とたわむれておいででありました。頬被りをした女が二人、あの辺ではごく普通にみかける、あの種類の女であります。夏場は朝早くから出っ張っております。川岸は涼しいので風に当たりに来たか、昼の弁当を遣いにきたかを装って、じつは何も持っていないで、振る舞ってくれるカモの現れを待ち構えているのであります。土地のやんごとない殿方衆がそのように躑けてしまったと申せましょう⁷⁸⁾。

その女どもを相手に殿様は誠の恋の鑑マシーアス⁷⁹⁾を演じていました。恋の手引きの大先生オウディウスの口説き文句にも増して甘い言葉をつらねておいでであったのです。女どものほうは、殿様がお熱を上げてきたと見ると、お昼を御馳走してよ、あっちで払うから、と恥じらいもなくゆするのであります。しかしながら、殿様は、下腹は熱くなっているのに財布は素寒貧でありますから、御馳走してよ、の一言で興がさめて、顔はしらけ、しどろもどろとおなりあそばしました。女どももそのへんは心得たもので、殿様が金欠病、と察するや、そのほうのお医者様にまかせましょう、とばかり、すうっと消えていきました。

わたくしはそのあいだにキャベツの球芯^{しん}を食して朝食といたしました⁸⁰⁾。なりたての小僧でありますから、ご主人様に見られないよう気をつかいました。それから家へ帰りまして、

汚れたところを掃き浄めようといりましたが、道具がないので他に何かすることはないと考えているうちに、二時まで待とう、二時になれば昼食だ⁸¹⁾、それまで家にいて殿様を待つほうが得と思えてきました。もしかしたら食べ物を持ってご帰還あそばすのではと思ったからであります、あては外れました⁸²⁾。

二時になろうというのにご帰宅あそばしません。わたくしの腹は、食う食うと音をあげるばかりであります。それで、わたくしは出かけることにいたしました。戸締まりをし、言われた場所に鍵をおいてから、街へでて、元の稼業にもどったのであります。病人みたいにか細い声でしたが、手を胸にあて、天を仰ぎ、その御名を舌にのせ、お恵みを、パンを、と戸口から戸口へと歩きました。気前のよさそうなお屋敷を回ったのであります。この稼業は乳飲み子のみぎりから身に具わっております。その上、盲目の大先生の薫陶よろしきえて成績優秀で合格しておりましたので、財布の紐の堅い不作の年ではありましたが、時計が四時を告げるまでに一稼ぎがかないました。パンを四斤ばかり手に入れたのであります。うち二斤は、干草を納屋に蓄えるように腹に食い溜めし、二斤を、懐と袖に納めました。その帰り道、露天の臓物屋の前を通ったとき、店番のお姐さんに、お恵みを、と申しますと、臓物の煮たのを少々、牛の蹄の切れっ端をくれました。

その足で急いで家に帰りますと、余裕綽々の殿様はすでにご帰還あそばしておいでで、マントをきれいに畳んで石の台の上に置いて、中庭をお散歩中でありました。わたくしが近寄りますと、ご自分のほうからもそばへおいでになりましたので、遅かったではないか、などとお小言を頂戴する覚悟でおりましたが、神のおとりなしがあったのか、どこへ行っていた、とお聞きになっただけでありました。

「二時まではお留守番をいたしておりましたが、お帰りが遅くなりそうなので、街に出てお金持ちのお情けにお頼りして⁸³⁾ これだけ頂戴してまいりました」

そう申しまして、パンと臓物を、上着の裾にくるんでもち帰っておりましたのを見せたところ、お顔が、とたんに明るくなりました。

「昼を共にとおもっていたが、もどっていなかったの一人で済ませた。そのあいだにきみがしたことは善だ。神のお名を唱えて人の恵みを乞うのは盗みをはたらくよりずっといいことだ⁸⁴⁾。その立派な心がけに我輩もあやかりたいところだが、一つだけ頼みがある。きみが我輩と一緒に暮らしていることを人に知られないように用心してくれたまえ。我輩の名誉と体面にかかわることだ。もっとも、この土地に顔見知りはいないから案ずるには及ばないが、それにしても、こんな土地へ来るのではなかった」

「ご心配は無用です。そんなことをわたくしに聞きにくる人などいませんし、わたくしも口外はいたしません」

「そうか、では貴様が一人で食うがいい、罪な奴め。そのうち神の御心にかなえば、二人で不自由なく暮らせるようになる。愚痴になるが、この家に住むようになってからというも

の、碌なことがない。家相が悪いのだ。運のつかない家というものがある。土台からして脆い家もある。この家はまさしくそういう家ではあるが、約束しよう、こんな家は、くれてやると言われても、もう住むものか。今月かぎりでおさらばだ」

わたくしは石の台の端っこに腰掛けました。おやつを食べたことは黙っておりました。大喰らいと思われなくなかったからです⁸⁵⁾。それから、もらってきた臓物とパンを食って夕食としたのでありますが、齧っているあいだに殿様の様子をうかがっておりますと、目は、わたくしが皿代わりにしていた上着の裾に食い入っていました。それは可哀想でしたが、神様には、わたくしをも同じように可哀想に思し召しあれと願いたいところでありました。殿様と同じ辛さを味わってきていたからであります。何度も何度も同じ目にあっておりました。日常茶飯事というやつです。一緒にお食べになりませんか、とすすめたほうがいいのではないかとの思いがないわけではありませんでしたが、夕食は済ませてきたとおっしゃったからには、受けてはもらえないだろうという遠慮もあったのであります。それでも結局、おいらのお費いでこいつの空きっ腹の悶えがやわらぐのであれば、そうしてやろう。こいつは、あしたの朝食を、きのうと同じように前の日に済ませたことにすればいいのだ、幸い食べ物もいつもより上等だし、おいらの腹も空っぽではないから。

そう考えているうちに神のおかげで希望どおりになりました。殿様の希望でもあったのでありますが、わたくしが食べ始めますと部屋を行ったり来たりしながら近寄ってきました。そしてこう言ったのであります。

「じつにうまそうだ。それだけうまそうに食う人間を見たことがない。食欲がなくても貴様の食いっぷりを見れば涎がでる」

「おまえさんが餓えているだけさ、腹が空いてりゃ何でもうまい」

あっしは腹で呟いて、やっぱり手を差し伸べることにしました。あの人もわたくしをそう仕向けるのに苦勞しておりました。それで、わたくしはこう申しました。

「いい道具があればいい仕事ができます。同じように、いい食べ物があれば食べっぷりもよくなります。このパンは飛びつきり美味にございます。それに、牛の蹄も煮込み具合がほどよくて、食べごろですから涎の出ない者はいません」

「蹄か」

「牛の蹄にございます」

「この世で一番うまいものといえば、それは牛の蹄だ。雉子も美味だが及ばぬ」

「美味にございます。召し上がれ」

こう申しまして、手の平に蹄をのせて差し上げました。パンも、これ以上はないと思われる真っ白いのを三切れ四切れさしあげたところ、わたくしの横に腰掛けて、とっくに喉から手が出ていましたから、がっとならに食いつき、パンは一個また一個、蹄は骨まで齧りました。飢餓貴族の飼う痩身犬⁸⁶⁾も尻尾をまく食いっぷりでありました。

「牛の蹄には大蒜と乾酪を油でいためた付け汁がよい、アルモドゥローテと申して絶品だ」
 「それよりもうまい付け汁で食ってるんだよ、てめえは、スキッ腹というソースで」
 あっしは腹で呟きました。

「どうしたことだ、きょう一日何も食わなかったかのごとく美味ではないか」
 「よく言うよ、食ってねえくせに。そううまくいくなら、おいらだって苦労しないよ」

あっしがこう呟いておりますと、水瓶をよこせ、というので、手元にあったのを渡しましたが、水の量は、汲んできたときのままで減ってはおりませんでした。食べ物を食べていない証拠であります。二人で水を飲み、前の日の夜と同じように機嫌よく寝床を共にいたしました。

ちょっと端折って申し上げます。わたくしとあいつは八日か十日のあいだ、こんなふうに暮らしました。あいつは午前中は出かけて、例の、規則正しい足取りで街を闊歩するのがありますが、いまや、ラサロが仕留めた狼の頭を己の手柄のごとくみせびらかして⁸⁷⁾、口元が緩みっぱなしの左団扇でありました。

こんな我が身の災難を何度ふりかえてみたことでありましょう。駄目な雇い主を逃れて、もっとましなところへと願って走ったら、今度は養ってくれるどころか、養ってやらなきゃならないやつと出会ったのであります。

それでもこの殿様があっしは好きでした。何も持たず、何の力もないのに、どこか憎めないところがあって、可哀想なくらいでした。

そんなわけで、このおかたにはひもじい思いはさせまいと、あっしが身を粉にし、ひもじい思いもいたしました。そんなある日の朝でございます、そのお可哀想な殿様が、起きて、肌着一枚の裸で屋根裏へ用を足しに上がっていったときであります。以前から素寒貧にきまっていると睨んでおりましたので、胴衣やズボンなど、枕元に置いていたものを広げて探りました。すると、錢入れはもっていましたが、鏝錢一枚入っておりませんでした。天鷲絨の毛羽がすり切れておりましたから、久しく空っぽであったとおもわれます。

「このおかたは掛け値なしの貧乏人なのだ」

あっしは考えました。このおかたは何一つ持たず、人の恵みも受けていない。それにひきかえ、あの目無しは貪欲で、坊主はけちけちの罰当たりでありながら、どちらも神から何かの恵みを頂戴していた。坊主は人から口づけを受ける手に恵まれ、目無しは流暢な舌を授かっていた。そのくせ、おいらを飢え死に追い込んでいたのだ。あいつらを人が嫌うのはもっともだが、人がこのおかたを哀れむのも、また道理ではないか」

このごろでもあんなふうにならぬように勿体をつけて仰々しく歩くお人を見ると、同病に見えて気の毒になりますが、そういうわたくしの胸の内を神もお察しなのでありましょう、掛け値なしの貧乏のあのおかたが、先ほどももうし上げたようなわけで、ほかのどのおかたよりも、わたくしは好きなのであります。欲を申しますと、あのように見栄を張らず、気位を下げて、そ

の分、暮らしを立てておいでになればよかったです。とはもうしましても、あの型は頑固に固まっていますから、もうほぐせないでしょう。一文無しが億万長者の風をつくって、挨拶も反り返ったままで、自分からは帽子を脱ごうとはしません。あの種の気位の病で一生を短く生きるおかたの、なんと多いことでありましょう。主よ、これは、なんとかならないのでありましょうか。

貧乏神を抱えこんで惨めったらしく生き続けていたわたくしを、運命は、もはやこれまでと甚振りしました。

あれはちょうど大飢饉の年のこと、風来の余所者で銭を持たない奴輩は町を出る⁸⁸⁾ とのお達しがありました。その日から、見つけしだい鞭打ちの刑に処すとの御触れであります⁸⁹⁾。四日後のこと、四つ辻通り⁹⁰⁾ で、列に繋がれた浮浪者が御触れの通り鞭で打たれるのをこの目で見てしまいました。怖うございました。それきり、法に背いて物乞いをするのはやめました。

それからというもの、絶食状態であります。あれは、みるも無惨であります。家に閉じ籠った二人が深々と沈みこんでおります。家の中は真っ暗であります。二日、三日と、何も口にしない日が続きます。言葉も出ません。

それでも生き延びられたのは裁縫工場のお姐さんがたのお陰であります、坊様の帽子などを作るお姐さんであります⁹¹⁾。近所合壁の誼みとなっておりまして⁹²⁾、ささやかな実入りの中からあっしにお裾分けをくれておりました⁹³⁾。あっしは干葡萄みたいに乾涸びておりましたが、お陰でどうにかこうにか露の命を繋いでいけたのであります。

そんなわけで殿様ほど惨めではありませんでした。殿様は一週間で口にしたものなどあるかないかでした。少なくとも家の中では何も食べておりませんでした。外に出てからはどうかというと、どこをどう歩いたかも、何かを食べていたかいなかったかもわかりませんでした。昼時にうちへ戻ってくる姿は痩せ細って、まるで紐が歩いていると申しますか、血統書付きの獵犬⁹⁴⁾ でありました。

名誉とか体面とかいう忌まわしい病に関わることでありますが、あのおかたは、うちには間違ってもあるはずのないライ麦の藁を一本口に咥えて戸口を出たところで爪楊枝をつかうかを見せていました。歯の隙き間に何か挟まるはずもないのに、ほじくるのであります⁹⁵⁾。それからひとしきりぼやきます。住んでいる家の不満であります。

「どう見てもこの家はよくない。これは、呪われているからだ。貴様にもわかるだろう。鬱陶しくて、暗くて、気が滅入る。住んでいるあいだは我慢しなければならぬが、それも今月かぎりだ、出ていくぞ」

空きっ腹に責め苛まれる惨めな日が続いていたわけではありますが、ある日、どこから転がり込んだか、幸か不幸か、素寒貧の殿様の懐に一両、一リアルという金が入ったのであります。殿様はベネチアの財宝を一手にしたかのごとく歓喜のご帰還をあそばしまして、その一

両をわたくしの手にとらせ、得意満面にもうされました。

「とっておけ。ラサロ、ついに神を味方につけたぞ。市場へ走ってパンとワインと肉を買ってくるのだ。悪魔の目をぶち抜いて、世間をあっと言わせてやる。それだけではない、喜べ、引っ越し先を決めた。星にもツキにも見放されたこんな家に長居は無用だ。月末で出る。家も家だが、その家の屋根に瓦の一枚目をのせた野郎もくたばれだ。俺が入ったときにはもう呪われていた。この家に住むようになってからというもの、ワイン一滴、肉一切れ口にしていないし、ひとときとして気の休まることがなかった。見ろ、気味の悪いところではないか。真っ暗で気が滅入る。さあ、早く行って、早く戻れ。きょうは食うぞ、関白様だ」

あっしは金貨を受け取り、水瓶をかかえて、市場への道を足に帆かけて駆けました。気分は無い上がりばかりであります。しかし、先で逆風が吹いて糠喜びになるのではあるまいかとの不安もあって、おいらの運命は所詮は凶、凶ばかりと思う間もなく凶に出ました。と申しますのは、我が殿に神が恵み給いしこの金子、いかにやつかわん、目一杯有効につかわねばと市場へ走るその途中、突如たちあらわれましたのが一体の死人であります。市場のほうからやってまいりました。坊様が大勢と、人の群れとが亡骸の棺を架いてやってきたのであります。わたくしは壁にはりつくようにして道をあけました。亡骸が通ったあと、そうです、棺の後ろから、喪服に身をつつんだ、あれは故人の奥方でありましょう、それと、大勢の女が連れだつてやってきたのであります、奥方が大声で泣きながら、こう話しかけておりました⁹⁶⁾。

「あなた、ねえ、おまえ様、どこへ連れていかれるのでありますか。あそこでありましょう。寂しくて、気味悪い家でしょう。真っ暗で、気が滅入ってしまう家でしょう⁹⁷⁾。食べたり飲んだり、しない家でありましょう」

聞いたとたんに天地がひっくり返った思いがいたしました。

「なんてことだ。うちへ連れていくんだ、この死人を」

そう思ってあっしはもう市場へいくのを中止いたしました。我が家へ向かって全力で走ったのであります。家へ駆け込んで、大急ぎで錠をかけて、助けを呼びました。「殿様、一大事です、玄関が危ない」と言って抱きついたのであります。殿様はかなり慌てたようでしたが、原因はあっしとはちがうところがありました⁹⁸⁾。

「どうした、何を嗅いている。あのように激しく戸をしめて、何があった」

「死人^{しびと}です。連れてくるんです」

「死人とは、異なことを」

「市場のほうで出会ったのです。そばで連れ合いが言っていました、あなた、ねえ、おまえ様、どこへ連れて行かれるのでありますか、真っ暗で、滅入っちゃう家でしょう、寂しくて気味悪い家でしょう。うちのことですよ。ここへ連れてくるんです」

これを聞いた殿様は、にわかに、なぜか、にっこりして、うわはっと噴き出しました。大

声でしばらくは口もきけないほど笑いこけたのであります。あっしは、扉にかんぬきをおろして、突っ張りをかうように肩を当てがって押しつづけたのであります。そのあいだに行列は通り過ぎていきました。死人もいっしょに去っていったわけですが、まだ、うちへ運び込まれてきそうな気がして縮かんでおりますと、ご機嫌の殿様は腹一杯は食ったことのない腹をかかえて笑いまして、それからようやく言葉を発しました。

「後家がそんなことを申したか。そうか、聞いた貴様が勘違いするのも無理はない。それにしても、もう大丈夫だ。とおりに過ぎた。扉をあけよう。あけて食べ物を買って来てくれ」

「もうちょっと待ちましょうよ。もっと遠くへ行くまで」

わたくしはこう申しましたが、殿様はとりあってくれず、通りに面した戸口へ出て、まだびくびくとためらっているあっしを、しょうのないやつ、と押しのけ、扉をあけて買い物にやりました。その日はたしかにうまいものを食しましたが、味わったという気はせず、それから三日ほどもあっしは顔色が冴えませんでした。殿様はあのときのあっしの勘違いを思い出してはにたにた笑いました。

わたくしにとっては三人目にあたるご主人様とは、つまり、この素寒貧のお武家とは、幾日かをこんなふうにご過ごしました。そのあいだにずっと知りたかったことがございます。このお人は、何が目的で、この地に来てこうして暮らしているのか、ということでもあります。おつかえし始めた日から余所の人だと勘づいてはおりました。知りあいもなく、親しく付き合っていそうな人もなかったからであります。やがて望みがかなって知るときがきました。その日は、そこそこ腹の足しになるものを召し上がっておりまして、かなりのご機嫌で身の上を語ってくださったのであります⁹⁹⁾。

お郷里は北のカステイーリャ・ラ・ビエハ地方で、近所に住むさる騎士を相手に、帽子を脱いで挨拶をするのが嫌でお郷里を出たそうであります。

「殿様、おっしゃるとおり、そのおかたのご身分が騎士であるとすれば、先に帽子を脱ぐのは殿様でありましょう、そうしないのは間違いではないのですか。騎士も帽子を脱いだとおっしゃいましたよね」

わたくしがこう申しますと、

「そう申した。あいつはたしかに騎士で、財産もある。そのうえ、我輩に対しても帽子を脱いだ。しかるにだ、いつも我輩が先に脱いでいたのだ。一度くらいはへりくだって先に脱いでも悪くはなからう」

「わたくしならそんなことは気にいたしません。特に年が上で身分も財産も上のお方なら」

わたくしがこう申しますと、

「おまえはまだ子供だから、名誉や体面のことがわかるまいが、今の時代、身分のある者にとって、財産とはすべから須く名誉と体面のことをもうす。よく聞け、我輩は、見てのとおり貴族としては下っ端の盾持ちではあるが、下っ端とて同じ貴族に違いはない。町の中で伯爵¹⁰⁰⁾

と出会って、伯爵が帽子を脱いで挨拶しなければ、次に会ったときはこちらから帽子を脱がずにすませたかった。それで、うまい手をおもいついたのだ。近くに来るまでに、用事があるかを見せて、すぐそばの家に隠れるか、できれば道をかえる。貴族にとって負い目があるのは神と国王に対してであって、他にはない。身分のある者は矜持を保つ。それを寸分もおろそかにしては正義にもとる。国元にいたころ、卑賤の職人輩の無礼を懲らしめんとして、その者を手打ちにしかかったことがある。なぜと申して、その者が会おうたびに、『神があなたを養いたまわんことを』とほざいたからだ。我輩は『下司下郎め』とその者をしかった。『貴様は育ちがよくない。そのわけがわかるか。神が汝を養いたまわんことをとは、食うや食わずの者に言うせりふだ』。それ以来、その者はきちんと帽子を脱いで、身分相応の挨拶をするようになった」

「誰かが誰かに、神があなたを養いたまわんことを、と挨拶するのは悪い習慣ですか」

わたくしがこう尋ねますと、あのおかたは、

「そんなことがわからんか、まいったな」

と呆れまして、

「下賤の者に対してなら、それでもよかろうが、身分があつて貴い者、たとえば、我輩のような者にむかつては許されん。許されるのは、軽くても『あなた様の御手に口づけを』までだ。騎士がいうなら『貴殿の御手に口づけを』になる。しかるに、郷里くにもとにおいてあの者もちいた口振りは、我輩が自力で食えていないかのごとく聞こえて、聞き捨てがならなかった。この世の何者であろうと、神と国王より身分の低い者から『神が汝を養わんことを』といわれたら、我輩は我慢がならぬであろうし、今後もたえないであろう」

「恐れ入りの助」

あっしは内心しゃっぽを脱ぎました。

「解せた。神がおまえさんを疎かにして養い給わんわけがわかった。養っておやんなさいと人が神に頼んでくれることすら耐えられないとは」

「とりわけ我輩の場合、貧しいとはもうせ、郷里に家屋敷などがないわけではない。その土地が、もしも、我が輩の生地から十六レグア離れたところ、コスタニーリャ・デ・バリャドリ―¹⁰¹⁾にあつて、もしも、いまなお朽ち果てておらず、建て付けもしっかり保たれているならば、豪壮な屋敷が建つ広さだから、低く見積もっても、マラベディ換算で千の二百倍にはなる。加えて鳩小屋がある。これが、もしも、今のように壊れていなければ、食用の鳩が一年に二百羽は生まれるはずだ¹⁰²⁾。ほかにもいちいち挙げないが、さまざまなものを残してきた。郷里くにもとを立ち去ったのは名誉と体面を守るためであった¹⁰³⁾。このトレドへは仕官の口があるとおもってまいったが、思ったようにはいかなかった。聖堂参事¹⁰⁴⁾や教会の幹部はうようよいるが、みみっちくて、けちくさくて話にならん。そこそこの騎士が声をかけてくることもあったが、あの程度の小者に仕えたら何でも屋にされて、扱き使われるのが関

の山だ。いやなら出て行けと、お払い箱にきまっている。給金は滞る。しかも、たいてい、というより確実に食い扶持どまりだ。条件を改めて、流した汗に見合ったものを取らせよう、とおっしゃるご仁があらせられても、取れるのは、奥の衣装部屋でしか通用しない為替手形だ。すなわち、汗臭い胴着とか、シミだらけのマントとか、上っ張りだ。それっぼっちだ。歴とした爵位持ちの貴族¹⁰⁵⁾につかえても、貧乏暇無しは変らん。と申す我輩に、爵位持ちのご機嫌をとる能がないと思うか。お声がかかれば側近におさまってみせようというもの。骨身を削って尽くしてもみせよう。嘘八百をならべる芸も、口八丁手八丁でとりいる術も、人並みに心得ている。殿様の駄洒落や悪趣味を笑ってさしあげ、御為になることであってもお気に召さないことには口をつぐむ。ご面前にあっては、言うことも為すことも一所懸命に徹するが、陰に回れば、身を削ったり粉にしたりはしない。声がお耳に達する場所にいれば、その場で召使いを叱りつける。御為の大事に怠りのないところを見せるのだ。だが、しかし、家来をお叱りになっている場に居合わせれば、殿様は困るだろうが、お怒りはごもっともながら、と泣きを入れて、叱られている家来の肩をもったりもする。さはさりながら、お気に召していることについては高く高くほめあげる。家臣のことは、同僚のことであろうと他家の家臣のことであろうと告げ口中傷をはばからない。他人の私ごとを嗅ぎまわり触れまわり、どこの殿様にもうける下世話な噂話には花を咲かせる。殿様というのは、屋敷に聖人君子がいることを好まん。その者を、世間知らずの、馬鹿の、堅物のときめつけて、そんな君子がいては気が安まらんとばかり遠ざける。そういう殿様に抜け目なくとりいるのが現在の風潮であるから、我輩も、いま申したとおりの、その風潮に馴染もうとしているが、あいにくカモがみつからん」

あの人はここでひとしきり自分の器の大きさをならべあげてから、それがむかえられない運命の悪戯を嘆きました。

そうこうしているときであります、玄関から男が一人と婆さんが入ってきました。男は、家賃を払えと申しました。婆さんは寝台の賃貸料を払えと。二人とも、ふた月分で、確か、合わせて十二か十三リアルであります。殿様が一年かかって払えそうにない額であります。ところが、この請求を殿様はうまく^{かわ}躲しました。

「市場で両替えをしてまいる。三十リアルの大判金貨をくずすゆえ、昼過ぎに出直してまいれ」

言いおいて出かけたのでありますが、それっきりであります。帰ってこなかったのであります。午後になって掛け取りが戻ってきましたが、遅かりし、であります。「まだ帰っておりません」とわたくしは申しました。やがて夜になって、それでも帰ってこないで、わたくしは家に一人でいるのが怖くて、近所のお姐さんたちのところへ行って、事情を話して泊めてもらいました。明るる朝、掛け取りが戻ってきて、お姐さんたちに、隣は戻っているか、とききましたが、それこそお門違いというものであります。お姐さんたちが、

「小僧さんなら、うちにいるわよ。玄関の鍵もあるわ」

と申しますと、「住人のことだ、店子はどこだ」ときいたので、わたくしが、存じません、と答えました。「両替えに出たきりで、わたくしも、お二人も騙されたようです」と申しますと、二人は大慌てで巡査と役場の書記をよびに走りました。戻ってから、鍵を受け取り、あっしを連れてうちへ行き、近所の人を証人に立ててから玄関の戸をあけました。それから、家財道具を差し押さえる、払うまでは返さん、と宣告して、家の中を隅から隅までさぐってまわりましたが、いまでも申しましたように、何もありません。

「ご主人様の財産はどこにある。長持ちとか壁掛けとか家財道具だ」

「わたくしは存じません」

「ゆうべ持ち出したであろう。サツの旦那、小僧をお縄にしてください。どこへ運んだか、こいつが知っているはずですよ」

合点承知と巡査があっしの胴着の襟をつかみました。

「神妙にしろ、旦那は財産をどこに隠した、言わないと逮捕するぞ」

あんな恐ろしい目にあつたことはありませんでした。目無しに道を教えていたころなら、襟をつかまれたことは数えきれないほどありますが、いつもやんわりでした。あっしは震えあがって、泣きながら、なんでも申し上げます、と誓いました。

「洗いざらい申せ。怖くない」

そう言って、書記は、据え付けの石台に腰をおろし、財産目録をつくる構えをして、どんなものを持っていた、とききました。

「家の建つ立派な土地と鳩小屋です、壊れてしまっていますが」

「それだけあれば十分だ。低く見積もっても借金を払う分に達する。それで、この町のどのへんだ」

「お郷里です」

「郷里とわかっているなら、話が早い、で、それはどこだ」

「北の国、カスティーリヤ・ラ・ビエハの国とおっしゃっていました」

巡査と書記は笑いこけました。

「よく判った。取り立ては簡単だ。掛け取り殿、情報はあり余っておりますぞ」

ご近所のお姐さん方もそこにいました。

「この子には何の罪もありませんよ。ついこのあいだ来て一緒に住むようになったばかりだもの。お武家のことは、旦那がたと同じで、この子は何も知りませんよ。あたしらは、この子が家にくるもんだから、可哀想に思って、食い物を恵んでやったりしているけど、晩になったらあの人と一緒にねているよ」

わたくしに罪のないことがはっきりいたしましたので、お構いなしになりましたが、巡査と書記が掛け取りの男と女に、手間賃をはらえ、とせまって一悶着がありました。男も女も、

差し押さえする物がないのだから手間賃を払う義務はない、といいはったのであります。対する巡査と書記の言い分は、もっと重要な一件をさしおいてこっちへ駆けつけたということでもあります。

それが嵩じて、わめき合いになりました。巡査の手先の捕り方が年寄りの財産である布団を、しめたとばかり召しとりましたが、しめて五人がドタバタやるばかりで、それから先がどうなったか、わたくしは存じません。気持ちの悪い布団ではありますが、あれ一枚が五人のために一役買ったのではないのでしょうか。布団としては、踏んだり蹴ったりされるばかりの現場を退いて、墓場で永眠する年なのに、またもや賃貸しに出て、ひと稼ぎすることになったことであらましよう。

さて、わたくしはそんなわけで、三番目の、素寒貧のご主人に捨てられ、幸せの薄いことを思い知らされました。なんやかや邪魔が入って思い通りにはいかなかったのであります。一般には、小僧が主人から逃げるのでありますが、わたくしの場合は、雇った主人が逃げたのであります。

第四章 ラサ口、メルセ会修道士に仕える。それからのこと。

こうなると、つぎの働き口をさがさなくてはなりません。四人目のご主人様をとということではありますが、先に申しました近所の御姐さんがた¹⁰⁶⁾の口利きで、御姐さんがたがお身内とおっしゃるメルセ会の修道士におつかえいたしました¹⁰⁷⁾。これが、修道院でのお勤めが嫌いで、三度のもを修道院の食堂でいただくのもいや、そのかわり、出歩いて俗世と交わるのが大好きという坊様でありました。精力的に御婦人のもとへ通う生臭でありまして、せっせせっせと通って、履き潰した靴の数は修道院随一であったでしょう。わたくしが靴というものを初めて履かせてもらって、初めて履きつぶしたのはこの修道士からもらった靴であります。八日もちませんでした。靴だけでなくわたくしの身が、旦那の通い詰めにつきあいきれなかったのと、そのうえ、いちいちもうし上げませんが、煩わしいことが色々ありまして、逃げ出すこととあいなりました¹⁰⁸⁾。

第五章 ラサ口、免罪符売り¹⁰⁹⁾に仕える。それからのこと。

運命に操られるまま、わたくしが出会った五人目のご主人様は、免罪符売りでありました。それが、肝がすわったと申しますか、恥知らずにてっしたお札売りの達人でありました。あんなやつにはもう出会えないであらましよう、会いたくもありませんが。あんなやつとは、世間のどちらさまも会ったことはないであらましよう。手練手管の四十八手を実に巧みに練りだすのであります。免罪符を披露をするためであります。街に入ると、まず、神父様や

修道士のもとを訪ねます。付け届けをするためであります。ほんのささやかな、お近づきの印であります。値のはるものではありません。売り物の額¹¹⁰⁾に見合ったものを、果物など、ムルシア産の萵苣が旬ならそれを一個、時期折々、旬の檸檬や蜜柑が手にはいれば二つ三つ、桃を一個、季節によって二個、梨は、青青したのが美味にございますよ、と二個。それでちょっとした便宜をはかってもらいます。信者をよび寄せて札を買うよう口添えをたのむのであります。手土産をうけとった僧侶や神父が札をいえば、その言葉のつかいよう、挨拶の仕様で、これはこれだけのもの、と学識の程をはかります。ラテン語が出来て学があるとみれば自分からボロをださないよう、ラテン語のラも発せず、もっぱら俗語で通します。スペイン語で通すのでありますが、その流暢なことは立て板に水でありました。逆に、こいつが修道会に入れたのは学業が出来たからではあるまい、推薦組にちがいない、カネとコネで入ったと見抜けば、態度をがらりと変えます。サント・トマス大師様になりきってラテン語をべらべらっと、いや、その、ラテン語紛いを、であります、それで二時間もぶっ通しでしゃべるのであります。

人が免罪符を買うのは、普通は福を招き寄せるためであります、買いそうにないときは、厄祓いにとすめ、まえもって村の中に厄病災難の種をまいておきます。罨や仕掛けをほどこすのであります。それにはあの手この手がありますが、いちいち申し上げると長くなるので、一つきり痛快なやつをご披露いたしましょう。実に巧妙な悪賢い絡繰でありまして、これ一つでやつの知恵の凄さが知れます。

あれは、サグラ・デ・トレドの在でのこと¹¹¹⁾、やつが二、三日のあいだ説教をしながら札を売ってまわりましたが、買わないし餌にも食いつきませんので悩んだすえ一計を案じました。翌日、朝早く、村人全員をよんで売りつけることにしたのであります。

その晩、宿で晩飯のあと、免罪符売りと巡査が¹¹²⁾、デザート菓子代をどっちが払うかを賭けてカルタを、絵札博打を始めたのであります¹¹³⁾、やがてそれがもとで喧嘩になって、悪態の応酬となりました。うちの署長が¹¹⁴⁾、巡査を泥棒よばわりいたしますと、巡査が署長を、詐欺師よばわりしてかえました。署長が、博打部屋の入り口にたてかけていた短い槍を脇に搔い込みますと、巡査は、腰に佩いた一刀に手をやります。二人が殺気立ちますと周囲も色めき立ち、仲に入ろうとする者もいましたが、共にこれを突き飛ばして矛を納めず、殺してやると息巻きましたので、家の中でも野次馬が犇きました。そうなると、剣だの槍だのは振り回せません。自然に、罵詈雑言の応酬になったわけではありますが、巡査が署長を詐欺師と呼ばわって、あの免罪符は真っ赤な偽物、偽物だ、とわめきたてて、一向にやめない、町の衆が見かねて外につれだしました。署長も、頭から湯気をたてていましたが、亭主や泊まり客が、御腹立ちのごもつともながら、と宥めにかかり、夜も更けてまいりましたからおやすみになられてくださりませ、ととりなして、ようやく収まり、みなみなご就寝あそばしたという次第であります。

あくる日の朝、署長は教会へ赴いて、鐘をならすよう頼みました。はい、村の衆をミサに寄せ、そこで説教をして免罪符を売るためでありまして、それで、村の衆はあつまりましたが、御札は偽物だとの噂がひろまっておりました。察の旦那が見破って、かんかんになってぶちまけた、と衆はきいたのであります。それで、買い気がそがれるどころか、そっぽをむく者もおりました。

それでも署長は説教台に上がりました。そうして、免罪の御札ほど有り難いものはない、買えば福がついて幸いがきて罪が消えると宣伝したのでありますが、その説教の最中に、教会の入り口に前日の巡査があらわれました。これが、型通りひざまずいて祈りをあげ、立ち上がってから一堂によびかけました。声は大きくはありましたが、口調は穏やかで冷静でした。

「皆様、本官の話をお聴きください。あとは、どなた様のお言葉でもお聴きあれ。本官は、ご当地へは、その説教師の山師めにさそわれて推参し、そして騙されたのであります。わしと組めば儲けは山分け、という言葉にそそのかされたのであります。しかしながら、わが良心をさいなむばかりか、御一堂の尊い財産を侵さんとしたことを心底から悔いて、いま申し上げます。この者が勧める御札は真っ赤な偽物であります。この者のもうすことを信じるなかれ。買ってはなりません。またこれももうし上げておきます、直接にも間接にも本官はこの者とグルではありません。いま本官は錫杖¹¹⁵⁾を床におき職務を離れてもうしあげます。この者は詐欺師として遠からず処罰されるのでありましようが、本官は片棒も先棒もかついていないばかりか、その虚言を暴き、よって御一堂が騙されるのを未然にふせいだのであります、ご一堂はその証人になって下されい」

巡査はここで一息ついたのでありますが、それまでに、騒動をさけるために、その場の、身分のある者たちが、巡査を外へおい出そうとする場面もありました。そのとき、署長が、手荒においだしたりしては破門ですぞと静止し、話を最後までききましょうと水をむけたので、巡査はあっしがいまもうし上たことを喋ったのであります。それで一息ついたところで、署長が、言いたいことはそれだけか、もっとあれば喋りなさい、と促しますと、

「三百代言嘘八百をあばくには、喋っても喋っても喋りきれんわ」

と答えました。すると、署長が、説教台で跪いて、天を仰いで語りかけました。

「主よ、天網恢恢、破邪顕正、全知全能の神よ。あなた様は真実をお見通しであります。あなた様は、みどもが謂れなくも辱めをうけていることをお見通しであります。主よ、あなた様が罪深いみどもをお赦し給うゆえに、みどもはあの者の仕打ちを赦します。あの者をお気に留めあるな。あの者は自らの言うところ、おこなうところを察していないのであります。さりながら、主よ、あなた様を侮るあの不遜は正義にもとる不埒であります。あれを御目溢しあれば有り難いお札を買わんとしている者が、あの者の、根も葉もない虚言を真にうけて買わないかもしれないです。よって、信者諸氏は甚大な被害を蒙らんとしております。主よ、

御目こぼしのない証に、この場で奇跡をおこしたまえ。百歩譲ってあの者の申すことを真とし、わたくしめが虚言をはいているとすれば、試しに、この身がたつ説教壇をば、足元から、ぐわらり、崩れさせたまえ。あやつとともに、この身をば、地中七丈の奈落にしずめさせたまえ。日の目をおがむこと、二度とかなわずとも、厭いはいたしません。みどもの申し上げることが真の真実であって、あの者が悪魔の口車にのって衆をたぶらかし、千載一遇の福を奪おうとしているのであれば、畢竟、悪行の報いを衆生悉くに知らしめたまえ¹¹⁶⁾」

ざっとう、帰依信心の礼をつくして祈ったのであります。と、その刹那、巡查が床に卒倒いたしました。どたあーん、という音が響きわたりました。巡查は、うおう、と猛獣がほえるような声を発して口から泡をふきました。口がねじれて、顔面はひん曲がって、足をばたばた、手をぶんぶんふりまわして、床をのたうちまわったのであります。倒れたときの地響きと、ぶっ魂げた皆の衆のわめく声、あれはもの凄いいものでした。互いの言っていることが聞き取れません。恐ろしくて、ふるえあがる者もいれば、神よ、この者を救い給え、ご加護をと祈る者もいました。自業自得だ、何が証言だ、三百代言ほざいた罰だ、と息巻く声もありました。

そのうち、何人かが、恐る恐る、へっぴり腰で、巡查に近寄って腕をつかむと、拳骨でついてきて手がつけられませんでした。いっぼうから足をつかんで引っぱろうとするとバタバタ蹴飛ばしてきます。騾馬も顔負けのあばれよう¹¹⁷⁾、男が十五人がかりで抑え込もうとしましたが、鼻っ柱に拳骨をくらうばかりでありました。そのあいだ、署長様は説教台で跪いたまま、目も手も天を仰ぎ、全霊を神のみもとに遣って忘我の境地にあらせられました。教会の中の悲鳴もドタバタもわめき声も、署長を神聖な瞑想からはつれもどせません。

それでも、こころやさしい善男善女の何人かが近づいて、声をかけ、お目覚めあれ、あの者をお救いあれ、とおがむように申しました。可哀想にこのままだと死にます、これまでのいきさつも悪態も水に流してやってくださいませ、ああしてのたうち回っているのが罪滅ぼしであります、あの者を危険と苦難から解放してやる口実なら、そう、神のご慈愛があるではありませんか。それに、あの者に罪があって、あなた様が真っ直ぐで正しいことは自分たちの目には明明白白でありますし、神はあなた様の願いをお聞きとどけあって意趣をかえしたもうたのでありますから、お咎めもこれまで、と嘆願したのであります。

署長様は、心地よい眠りからお目覚めかの御様子で善男善女にやさしい眼差しをお配りになり、罪を犯した者に一瞥をくれたのち、一堂に向かって、いと穏やかに、こう宣うたのであります。

「こころやさしい御一堂、天罰が下った者のために赦しを請うてやることなどないではありませんか。しかれども、悪に悪で報いるなかれ、恥辱も堪忍せよと神は命じておいであります。その命じるところを神みずからが果たしたまえと祈りましょう、われわれにできることはそれだけです。御教えを妨げんとして逆鱗にふれた者にも赦しのあるよう祈りましょ

う、さあ御一堂」

署長様は、かく宣うて説教壇をおおりになり、一堂に、篤い信仰心を余すところなく示すようすすめました。つまり、罪人を赦したまえ、あの者に元の健康と正気をお返しあって、悪魔をはらいたまえ、罪を懲らしめんがために、悪魔の憑依を許したもうたのであれば、いま去らせたまえと祈りましょう、というわけであります。

一堂は、われもわれもと祭壇にむかってひざまずきました。そうして、坊様方も共に小声で連祷をとなえました¹¹⁸⁾。連祷をうけた巡査は、十字架と聖水をたずさえて我がご主人様のそばへ歩みよりました。我がご主人様は天を仰いで、両手をひろげて、祈り始めました。目の玉はひっくり返って白目が少々見えるだけでありました。信心の篤い分だけ祈りも長くなりますが、この長いのに聴き入って一堂は泣きました。復活祭に御受難の節談説教を聴いて法悦にひたれば、ときに涙がこみ上げますが、あれであります。主にむかって、お望みは罪人が死ぬることにあらず、生きて悔いることでありましょう、悪魔にそそのかされ、死と罪業にあやつられている者をお見捨てあるな、生きて元の体にもどし、悔悟の告白をさせたまえと祈ったのであります。

それから、御札を持ってこさせて巡査の頭にのせたところ、少しずつ回復し、やがて我にかえて、正気にもどり、署長の足元にひざまずいて赦しをこうたのであります。悪魔にそそのかされ操られていた、と告白したのであります。署長のことが恨めしく腹立たしくなり、困らせたくになっていたところへ、悪魔の声がかこえた、といったのであります。悪魔は、だれもが札を買ってしあわせになるのが癪だ、とわめいたそうです。

署長が巡査をゆるして仲がもどりますと、村の衆は先をあらそって御札を買いました、およそ、村で魂をもつ者で御札を手に入れなかった者はないでありましょう。夫が買う、妻が、息子が、娘が、若い男も女も、みんなが買ったのであります。

これが近くの村々にも伝わりましたから、行く先々、説教をしなくても免罪符は飛ぶように売れました。こちらから教会に行くまでもなく宿をたずねてきて買ったのであります。まるで、梨か桃を只でふるまってもらうような気分で押しかけたのであります。そのへんの村を十か十二回りましたが、どこでも千、二千と、一度も説教しないままはけていきました。

しかしながら、これは詐欺でありました。白状いたします、わたくしにも罪があります¹¹⁹⁾。はじめは、ただ驚くばかりでした。わたくしも信じて疑いませんでした。そのことでは、村の衆と同じであります。ところが、あとで、親方と捕り方が、うまくいった、ほろ儲けだ、と笑うところを見てしまったのです。そのときはじめて、二人をグルと知りました。手口は、親方の才覚が仕組んだものです。端っくれのあっしも、お見事、と感じ入って腹でつぶやきました。

「罪のない人をどれくらい手玉にとってきたんだろう、この二人」

結局、五番目の、この親方に仕えたのは四ヶ月ほどで、相変わらずの苦労をなめました、

食うほうの心配はせずにすみません。

第六章 ラサ口、教会内礼拝堂付の司祭に仕える。

つぎは、タンバリン太鼓の色付け師に仕えました¹²⁰⁾。絵の具の素を白で挽く仕事ですが、我が身を白で粉にひかれるような辛い毎日でありました。

齢嵩がもう一丁前の大人になっていたある日のこと、大聖堂の中におりますと、小さい礼拝堂の一つを預かる堂守司祭から声がかかって雇われました¹²¹⁾。それで、驢馬一頭と、水瓶四個と、鞭一振りをあてがわれました。街で水を売り歩くのであります¹²²⁾。それが、わたくしにとって、いい暮らしへの階段の一段目となりました。わたくしに向けた仕事でした。口が卑しくなくて、贅沢はしませんし、声がよく通るので、物を売り歩くのに御誂えであったのです。毎日の売り上げから三十マラベディ¹²³⁾を司祭様に納めますが、土曜日の売り上げは、まるまるわたくしの取り分になりました。平日は三十マラベディを納めて、余りはわたくしのものということになります。

この商いがトントン拍子に伸び、節約もいたしましたので、四年で結構な蓄えができて、着る物などを買いそろえました。新調とは参りません。古着屋で買ったのであります。胴着は、毛羽は草臥れておりましたがフスタン織¹²⁴⁾であります。上着は、袖が擦り切れてはおりますが、三つ編みの紐で括ようになった、胸開きの胴帯つきであります。それと、毛羽がふさふさしていたはずの羽織合羽。剣は、本場クエジャルの一等昔の古い一振りであります。こうして、いっばしの身分の装いを調べてから¹²⁵⁾、ご主人様に、驢馬を返上し、水売りの商いはこれまでと申し出ました¹²⁶⁾。

第七章 ラサ口、巡査の手先きとなる。それからのこと。

礼拝堂の司祭様からお暇を頂戴してから巡査の手先の捕り方になりましたが¹²⁷⁾、長くは続きませんでした。なにしろ、危のうございます。あっさりとやめる気になったのは、ある晩、悪党どもが齒向かってきたときであります。御上の御用も踏み込めない教会へ逃げ込んだやつらが¹²⁸⁾、石の飛礫やら棒きれやらで手向かってきたのであります。それを、巡査は勇敢に踏みとどまって待ったばかりに痛い目にあいました¹²⁹⁾。あっしは、ずらかって難をのがれましたが、それに懲りて廃業いたしました。

そこで、もっと安全で、老後の備えもできる職にありつけないものかと考えておりますと、神の御光明がさして、お導きがありました。朋輩や旦那衆のおかげをもって、念願の王国公務の勤め¹³⁰⁾がなつたのであります。出世を望むなら王国公務の役人以外に道はない¹³¹⁾と見ておりましたので、それまでの苦勞もこれで報われたと申せましょう。今日という日を拝

めるのも、役所の御用を務めていればこそ、神とあなた様におつかえできる光栄もその賜物であります¹³²⁾。

わたくしの役目は、当市で販売される葡萄酒に触れてまわることでありますが、物品の競売や遺失物の広報でも声をあげますし、引きまわしの咎人に付き添って罪状をとなえることもやります。平たく申しますと、触れ歩き¹³³⁾ ではありますが、苦勞せず役に馴染めて¹³⁴⁾、いまやこの関係では、わたくしを介さずには何事も埒があかぬ仕組みになっております。葡萄酒でも何でも、ラサロ・デ・トルメスのあずかり関わらぬところでは商売にならない、と誰もが心得ております。

やがて、お近づきをたまわっておりました主席司祭様が¹³⁵⁾、はい、サン・サルバドル教会の、いまのわたくしのご主人様であらせられ、あなた様に御仕えなさいます身でお友達でもあらせられる御前ではありますが、わたくしがお蔵の葡萄酒をふれ歩きさせていたしておりました関係で、仕事ふりと堅気なところを見込んでくださいますて、端女のこれこれを女房にせよ、とお世話くださいました。それで、わたくしは、偉いお方のお声がかりでありますから、良縁に違いないと思って謹んでおうけいたした次第であります。

女房はそれはそれは良く出来た女であります。女房が働き者であるうえに、御前がわたくしどもに目を掛け、何かとお世話して下さいますので、この結婚を、いまに至るまで、後悔したことはございません。御前からは、四季折々に、小麦を一荷とか、御降誕祭にはご自身のお肉を、また、丸いパン一對をお供えする時期は、冬が去って衣替えなさる折ゆえ、分厚いズボンのお下がりをと、何から何まで、頂戴しているのであります¹³⁶⁾。住まいのお世話も、お邸の横に小さい家を借りてくださいます¹³⁹⁾、日曜と祭日はお宅で昼をご一緒させてもらっていたのであります。

ところが、そのうち、人の行く先どこへでも付き纏う口さがない連中が、面と向かってや陰口で、あることないことを言うようになりました。女房が御前の閨のお世話や食事の支度までしているのを見たなどと。それが事実なら¹³⁸⁾、神がやつらの肩をもっても致し方ないのでありますが、女房は蓮葉ではないし、ふしだらもはたらいていないうえに、御前が、「大事な、まかせておけ」とお約束くださいましたので安心しております。御前は、ある日、女房もいるところで、しんみりと、こうおっしゃたのであります。

「のう、ラサロ・デ・トルメス¹³⁹⁾、くちさがない者どもに本気で取りあっていると、出る芽も出ぬぞ。女房が拙宅に出入りしているのを、見たがどうした。女房は、おぬしの名譽を傷つけたり、妻としての貞操を汚したりはしておらんではないか。わたしが保証するのだ。世間がどう言おうと耳をかすな。耳あたりのいいことだけを聞いておればよいのだ、おぬしの得になることだけを」

「御前、わたくしは、寄らば大樹ときめております、それを曲げるつもりはありませんが、朋輩がさように言いちらしたのは事実であります。それゆえ、御前にはおそれおおいことな

がら、女房に面と向かってははばかり¹⁴⁰⁾を、御前に申し上げます。やつらは、女房が、あつしと一緒にいるまでに、三度は子を産んでいる、と三度以上も、はっきりと申したのであります」

女房はその場で大声を発して我が身を呪いました。家が崩れそうなほど喚きました¹⁴¹⁾。それから、さめざめと泣きまして、自分をこんな男と一緒にさせたお方が憎いと罵ったのであります¹⁴²⁾。女房の口からそんな言葉をきくのは、死ぬより辛うございました。それでも、御前とわたくしとで、あっちとこっちから、抱きかかえるようにしてなだめまして、ようやく泣きやんだのは、あつしが、このことは二度と口にしない、と誓ったからであります。夜でも昼でも御前のところへ出入りすればいいではないか、うしろ指をさされるようなことをしに行くわけではないのだからと申したのであります。それで御前とわたくしと女房の三方で丸く収まって、それからこちら、わたくしのまわりでこの一件を口にした者はおりません。だれかが言いそうな気配がすると、わたくしが口を塞ぎにいきます。

「友達なら、おれが辛くなることはいふな。おれを苦しめたいやつは、友達ではない。女房とのあいだにヒビをいれるようなやつとは、絶対につきあわん。あいつはこの世で一番好きな女だ。自分がどうなってもいいほど愛している。縁を結んでくださった神には限りないご恩を感じている。おれには過ぎたしあわせをたまわったのだ。あいつは、大都の門の内に住むどんな女とも肩をならべられる女だ¹⁴³⁾。それは、教会で聖餅を頂戴するときに誓ってもいい。文句のあるやつとは刺し違えてもいい¹⁴⁴⁾」

それからは、この一件を蒸し返すやつはおりませんし、夫婦は、仲睦まじくやっております。

今年は、丁度、常勝不敗の皇帝陛下が、名にし負うトレドの都にお運びあり、国会を開催し給うた御年¹⁴⁵⁾のこととて、町中が祝賀の気分ひたりおりますれば、歓呼の賑わいがお耳にも達しているとぞんじます。そして、きょうこのごろ、わたくしは、順風満帆、幸福の絶頂に達しております。

注

- 1) 本書はスペイン文学史上、初の自伝風小説である。作者は「わたくし」が口述したものを代筆屋が文字に起こしたふうを装っている。無文字の人物の話し言葉による書簡体であり、作者と語り手「わたくし」の信条は同一ではない。
- 2) 章の題名は内容にそぐわないことが少なくない。作者ではなく、作者の手稿を清書した筆耕職人や印刷職人が付けることもあった。これらが今日の編集者を兼ねていたのだ。
- 3) 父の名トメ Tomé はスペイン語の動詞の「盗った」と同音。盗みを白状したのが運の尽きの父であった。母アントナは当時の悪名高い女性と同名。在所テハーレスは小集落。いずれも当時の田舎が匂う名で、作者はそれを鎖にして、トルメス、トメ、アントナ、テハーレスと、「タ行音」の語呂合わせで由緒のいかがわしさを匂わせる。

- 4) 偉人や英雄が名に地名をつないで名乗る例は物語の世界では常套である。ラサロの本が出るのは50年前、全盛をきわめる騎士小説の代表作は主人公に生地ガウラの名を添えて『アマデイス・デ・ガウラ』と名乗らせている。ラサリージョにトルメスをそえるのはその振りである。ラサロの50年後、セルバンテスもアマデイス・デ・ガウラに倣った。ドン・キホーテに出身地の名ラ・マンチャをそえてドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャと名乗らせたのである。川で生まれたことを意味ありげに言うのは『出エジプト記』のモーセの振り。モーセは生後まもなくナイル川に流され王族の者に拾われた。
- 5) 水車番は生産者がもちこむ穀物の量を知りえたので、穀物による納税の監視役のようでもあった。町村には地域の穀物を粉に挽く水車や風車の実態を国王に報告する義務があった。南京袋も人の胴もスペイン語で costal という。そこから、ラサロの父は瀉血治療師が人の胴から「血を抜くように」袋の中身を抜いたとも読める。粉挽きの悪評は「仕立て屋百人と粉挽き百人と機織女百人は盗人三百人と意味は一緒」という諺でも伝わっている。また、水車は集落から離れた川岸の低地にあって、たいてい、近くに夜鷹の商い小屋があり、粉挽き男が女房に客をとらせることもあった。男たちは小麦を持ち込むのを口実に女房のもとへ通い、夫が隙をみてその小麦を撥ねたとも伝わっている。石臼の回転や女が篩いをふるう姿態は情交の婉曲表現として文芸や芝居で多用された。「司祭とあの男は同じ臼をつかう」という諺がある。
- 6) 裁きも正義もスペイン語では同一語 *justicia*。ここでは、マタイの「正義をつらぬいて追われし」が「裁きによって追われし」と曲げられている。
- 7) 文法どおり解釈すれば、敵であるはずのイスラム軍に加わったとも、艦隊に加わったとも読める。ラサロはこれを曖昧にして父親の血筋をぼかしている。スペインでイスラム追放の詔勅が出たあとにキリスト教に転んでスペインに残留した者を歴史学上はモリスコというが、当時は俗に、アフリカのイスラム教徒と同一視してモーロとよんだ。
- 8) キリスト教徒の軍でも騾馬ひきはイスラム・モーロの血筋が多かった。騾馬は馬と驢馬をかけあわせた家畜。おとなしくて力持ち。
- 9) いかがわしい生業を匂わせている。
- 10) サラマンカはスペイン最古（創立 1218 年）の大学都市。マグダレナ教会は教会税の徴収者であるから羽ぶり（葉ぶり）のいい大樹である。
- 11) 厩女郎。
- 12) 作者は、全篇、黒人をネグロと言わず「暗色モレーノ」と婉曲。
- 13) 卵と交換にいろんな品物ももらっていた。
- 14) 市に買い取られていく穀物のすべてが穀物担当執事の管理下にあった。
- 15) 愛人とのあいだに出来た子を養うこと。甥姪として育てることが多かった。
- 16) 牛馬の餌にする大麦をくすねる馬丁には鞭打ちのあとの傷口に煮えた脂をたらすことが法で決まっていた。また、異教徒の男と一緒にになった女には百叩きが決まっていた。サイドはアラビア語名。キリスト教の洗礼を受け、キリスト教徒名があったとおもわれるが、異教徒とみなされていた。
- 17) 飯盛女になった。「粉挽きの女房」「厩女郎」「飯盛女」の順に、当時の社会的評価は下る。ソラーナ館は現在のサラマンカ市役所の地。
- 18) 1510 年にチュニス沖のジェルバ島に籠るイスラム教徒軍を攻め、大将と従軍将兵の3分の1が戦死して惨敗。スペインで数十年語り継がれた大戦であるが、ラサロの父がそこにいたかど

- うかは曖昧。ラサロは先に、「モーロ討伐の艦隊」といっただけでこの大戦にはふれていない。母は夫を輝かせて息子の幸先を照らしたいがゆえ嘘を言ったのかもしれない。10年後にもスペインは同じ島を攻めているがこの戦は語り草になっていない。どちらの戦であったかが定まればラサロの生年の見当が見つが、今のところ決め手はない。
- 19) 少年と盲人の組み合わせは、16世紀以前から笑劇や神秘劇にでていいる。ラサロの時代の少年と盲人が交わした雇用契約書が現存し、「少年は契約期間内に主人を棄ててはならない」「主人は少年に食と衣をあてねばならない」とある。盲人が小僧に愚弄されて棄てられる話は中世のフランスにもある。
- 20) 風雪で磨り減ってのっぺりしているの、初めて見る者には「牛」とは決めかねるが、家畜文化を護るための象徴としての牛像。サラマンカはスペイン最大の闘牛用雄牛の産地。現在、サラマンカ市の紋章は雄牛。
- 21) 15-16世紀、社会階層を昇ることの正当性が熱く議論された。
- 22) この座頭の祈祷は、低音の魅力を聴かせつつ、一本調子にして、内容を聴き取ろうとしても聴き取れないことを狙った。同業のおおかたが声は甲高く動作も大袈裟であった。この座頭のスタイルは伝統への批判でもある。
- 23) カトリック教内部の照明派が出した「祈祷をするときに外面（顔の表情や身振り手振り）を仰々しくつくるのは誤りである」という見解を1522年の勅令は「違背、冒瀆、異端」とみなした。照明派は、大袈裟な式典や外面的な信仰を拒絶して内面に重きをおくが、この思想を育んだロッテルダムのエラスムスは「法衣が修道士を作るにあらず」と説く。盲目の座頭の行動には、矛盾だらけではあるが、その思想が見え隠れする。
- 24) 父親が南京袋から小麦を抜き取ったように。
- 25) 半小粒が2枚で1小粒（ブランカ錢）。4小粒で1マラベディ。34マラベディで1リアル。当時、兵士の日当が5リアルほど。
- 26) 当時、商品が正価の半分以下もしくは半分以上の利幅で売られた場合、その売買は取り消し可能とされていた。正価が10円のを5円もしくは15円で売買してもよいが、4円もしくは16円では取り消しが可能ということ。ラサロは口の中の両替えの合法をとなえている。
- 27) 座頭が祈祷するときの表情に似る。
- 28) 「お前をきずつけたものが、おまえを治す」
- 29) 当時、聖フアンの日（6月24日）に雇用契約を改めたり引っ越しをする習わしがあった。そこから、土地を移ることを「サン・フアンにする」と言った。
- 30) villa del duque de ella（ビジャ・デル・ドゥーケ・デ・ジャ）。語呂合わせのあそび。ESCALONA エスカローナ公爵がVILLENA ビジェナ侯爵を兼ねていたこともジャ音の連続の遊びに一枚加わっている。1523年には公爵自らが邸に照明派の俗世指導者をすまわせて魂の問題を語らせたという。照明派の寄り合いの多い町であった。照明派はエラスムス思想の実践者。エラスムスは皇帝カルロスV世の家庭教師で信望をうけていたので、皇帝がスペイン国王となってドイツからスペインに移った際、多くの人文主義者が同行してスペインにエラスムス思想を伝えた。しかし、ルターが教会から離反してからは、エラスムス思想もその同類とみなされて危険視された。皇帝のラテン語書簡担当秘書を務めていたアルフォンソ・バルデスも身を隠して転々とした。いまのところ作者不詳の『ラサリージョ』であるが、この人とする説がもっとも強い。

- 31) 食物は持ち込みの宿。煮炊きできる暖炉がある。
- 32) 注 25 参照。
- 33) 母を残してサラマンカを離れるとき橋のたもとで牛の石像に頭突きをさせられたことへの復讐でもある。スペイン語の「嗅げ」と牛の攻撃をさそう「オレー」がoléの一語に重なっている。
- 34) ラサロが逃げ出すエスカローナからトリーホスまでは24キロある。夕方に出て日没までには着けない距離だ。それを、着いた、というのは、ラサロの急ぎようを誇張してのこととおもわれる。当時、地域毎の警察権のおよぶ範囲は周縁30キロほどであった。ラサロはそれを知っていて、トリーホスではまだ不安であったと見える。
- 35) この道筋では、10キロ後戻りしたことになる。マケダはエスカローナとトリホスの中間にある。ラサロが座頭を置き去りにした町を、エスカローナではなく、当時のサント・ドミンゴ・デル・バジェ（現在のバル・デ・サント・ドミンゴ）とすると、ラサロの移動の距離の辻褄があう。この町には、今も、石の支柱で囲む回廊式の広場があり、ラサロの時代、広場に小川のような溝があった。トリーホスまでは4キロ。ラサロの足で一気に走れる距離だ。ここからマケダへは12キロ。追っ手をまくためか、V字に道をかえている。
- 36) ここでいうミサはパンと葡萄酒を会衆に分つ聖餐式。イエスはパンと葡萄酒を自分の「身体と血」といって弟子に分け与え、新しい契約をむすんだ。そこに由来する儀式。
- 37) 諺。「煙を避けたら火に落ちた」「雄牛から逃げたら川に落ちた」とも。
- 38) 本書は異端審問によって1557年に発禁となったが、その後、1573年に異端審問官ロベス・デ・ベラスコが改めた版を出した。そこでは、「袈裟や衣をまとっているうちに染み付いた」が削除され、「生まれついでの上りついでか」がのこされている。聖職者批判がきつく咎められた証左であるが、残った「生まれついでの上りついで」には「根がユダヤだから上りついで」の暗示がある。聖職者であっても、その血筋にユダヤの疑いがあればユダヤ色を愚弄することに咎めはなかった。スペインの異端審問所は、カトリック両王が、1478年、統治下の国々で正統カトリック教を護る目的で創設した。異教徒の追放と改宗を促進する政策の一環であり、洗礼を受けたキリスト教徒のみに適用されるとしたが、実際は、統治下の全臣民を取り締まりの対象にした。とくに、教会、あるいは聖職者を介さない信仰を説く観照派の取り締まりを厳しくし、教会を脱したルター派の波及を監視する機関にもなった。異端審問制度そのものは、1184年、フランスで創設されたもので、スペインでは国王の直接の管理下にあった。廃止は1834年。
- 39) 婚礼など、祝い事に女性信者が教会に供えた小さいパン。
- 40) 家に腸詰めなど豚の加工品をおいていないことを強調しているとすれば、この僧に隠れユダヤの匂いがするという暗示にもなる。
- 41) バレンシア地方の菓子も昔も今も好評。ラサロの念頭にはトゥロンという乳果や果物の糖蜜漬けがありそう。
- 42) この地域カスティージャでは1520年から1553年にかけて牛肉の価格が上がりつづけた。1ポンド、1536年10小粒（ブランカ銭）、1550年16小粒（ブランカ銭）。ラサロのこの場面を1536年のこととすると、この僧侶はブランカ銭5枚で250グラム弱買ったが、本が出版された1550年-1554年頃には150グラム弱。
- 43) 土曜日、キリスト教徒は肉食を齋んだが海から遠いトレドでは魚を得にくいので畜類の頭、手足、臓物を食してもよいとしていた。土曜日の肉齋みは、キリスト教徒が、1212年、対イス

- ラム、天下分け目の戦闘に大勝した記念に、土曜日は肉食を断つという誓いをたてたことに由来す。
- 44) 死者の家族が埋葬のあと参会者を酒食でもてなすお斎には、僧侶の出席が義務づけられていた。
- 45) 呪術治療師のごとく飲んだ。唾や息を吹きかけて病を癒す呪術師。酒を口にふくんで病人に吹きかけた。そこから、大酒飲みとされていた。
- 46) 座頭乞食から下級ながら聖職者へと雇い主の階級は上がったが。
- 47) 1573年の異端審問官検閲版は、「聖霊の」が「何者かの」にあらためているが、人をなぞらえていう「天使」にも、異端視している「観照派」の言葉「照明」にも手を下していない。
- 48) 「地面に落ちたパンを拾い上げて、神様の顔、と呼ぶ」。これを照明派の不敬な口振りとする見方もある。
- 49) 一般に「一度称える」というところだが、仕えている僧の口まねか「二度」という。ラサロは相手に応じて言葉遣いをかえる。
- 50) マラリアの一種。隔日に発熱する。治療には絶食が効くとされていた。パンの数がへっていることに僧侶が気づくのが、家に戻ってから3日目。このとき、ラサロが「絶食」にもどる。
- 51) 聖人ファンは、召使いを生業とするものの守護神。
- 52) フランソア一世のこと。イタリアのパピア争奪戦でスペインに敗れ、自身がマドリードに幽閉された。
- 53) ベネローベは、夫を待つより再婚を、とせまる男たちに、この布を織り終えたら相手を選ぶ、という口実をもうけて織りつづけるが、昼織って、夜解くをくりかえして婚選びを引き延ばした。
- 54) スペイン語で、蛇は、一般にオスメスにこだわらず女性形 *culebra* で言い習わすが、オスであることを強調すれば *culebro*。ラサロは自分をオス蛇としている。
- 55) シーツなどで被ってはいない。藁布団ではなく、藁。
- 56) 柄が竹筒状に空洞になっている。現存するものから推して長さ8センチ、内径1センチほどの鉄製。
- 57) 盾持ち *escudero*。江戸時代の侍の槍持ちに相当し、騎士に従って槍と盾を持った。ただし、江戸時代の間頭奴とはちがって、身分は特権階級の貴族であり、領主の法権の埒外にあって、納税を免除された。引き換えに、国王軍で戦う旗本の義務を負った。本来、その分際は貴族の最底辺にありながら騎士になれる望みがあったが、ラサロの時代、その可能性は失せて久しかった。この時代、盾持ちのたいていが、上級貴族の寝床を調べたり着替えを手伝ったりする召使いにとどまり、無職の浪人も多かった。それが、特権階級の気位をすてきれず、「武士は食わねど高楊枝」を地でいき、以前から芝居や笑い話の典型的人物の一つになっていたが、ラサロの主人となるこの盾持ちの登場で現実味が増した。50年後にはセルバンテスの造ったドン・キホーテという貴族と盾持ちサンチョが、あくまでも虚構でありながら、その写実のうまさで、実在するような錯覚をおこさせる。ラサロを従者にした盾持ちは50年前にその先駆を演じているといえよう。
- 58) 1546年4月21日のトレド市条例は「余所者も病人であれば乞食をしてよい」としている。
- 59) 条例とは逆に、トレド市民は現在も乞食に厳しい。
- 60) 当時の市場には持ち帰り商品の運びを生業とする人足が待ちかまえていた。家出少年や浮浪児も多く、これらの餓鬼が、邸宅の台所に荷物を運び込んでから、料理場の下働きらと組んで、

生きのこるための盗みをはたらいたことが文芸や絵画から偲ばれる。これら、なんでもちよろまかす悪童、悪餓鬼が「ピカロ」と呼ばれるようになるが、その呼称を伝える資料の最古は1554年、『ラサリージョ』の現存最古版と同年のものである。やがて、ほぼ50年後から、ラサロ風の人物の生涯を自伝風にした物語群を「ピカロ小説」とよぶようになる。要約すれば、「生まれが下賤、名誉とは無縁、屈辱をうけるばかりの血筋、そこから転々と職をかえ、主人をかえ、土地を移って、出世と成功を望み続けた人物が、生涯を釈明する自伝」と見せ掛けるフィクションである。その最初を、スペインで1599年に第一部、1604年に第二部が出た『グスマン・デ・アルファラーチェ』（マテオ・アレマン）とするが、實質上は『ラサリージョ』を「ピカロ小説」の起源とみなす。

- 61) ミサを「聴く」には聖歌コーラスを聴くのと説教を聴くのとがふくまれる。殿様がミサを聴くのをラサロは観察していただけか。ラサロも殿様も祈りや聖体拝領には参加しなかったのか。血筋が生粋キリスト教徒から逸れていることを暗示する一節ともとれるし、単に、新しい主人を観察するラサロの鑑識眼の鋭さを強調しているともとれる。
- 62) Capa カパ。マント。襟付き袖無し。円形の布地の半径を切り込んだものに襟を付けた。防具にもなり、顔を隠すこともできる。雨具には別にフェルト製があるが、貴族は織物地の capa を着て身分の象徴とした。この盾持ちにとっては身体の一部といえ、それゆえ清潔にこだわる。余談ながら、日本の芝居や歌の股旅道中でいう「合羽からげて三度笠」の capa はその略式であり、その名は雨具名として残っている。羽織は capa の一種フェレルエロ ferreruelo がなまった「はおり」で、織田信長の時代に陣羽織として伝わり、武家の象徴的な衣装となっていた。
- 63) 身体と着衣の清潔を問いつつ、キリスト教徒としての汚れない清浄な血筋をほのめかしている。当時のスペインやその支配地域では、四代以上続くキリスト教徒でなければ「人」に非ぬ「非人」の扱いを受け、社会進出の機会を制限された。
- 64) 玄関に入ってすぐのところには石か石灰で造り付けた腰掛け場。
- 65) 武家はこの行為で自分の血筋の清浄を唱えている。
- 66) 鍋料理は豆、蕪、豚の煮込みが代表的。ユダヤ、イスラムが避ける豚脂を食することがキリスト教徒の血筋の清浄を示す証にもなった。
- 67) 戸口に身を寄せたのはパンをひったくられないように警戒してのことか。
- 68) 製造者の血筋の清浄まで問うている。
- 69) 身ぎれいにすることで自分の血筋の清浄を誇示しているつもりである。
- 70) 「壺に酒なく、鍋に豚なし、その膳はユダヤかイスラムだ」(当時流行った諺)。ここでは、無一文で何も買えないからではあっても、二通りにきこえる。
- 71) 簀の子と敷き布団の関係を豚の背骨になぞらえていることから、書き手がこの武家の血筋の弱点を突いているようにも見える。
- 72) アラビア語でアルファマル毛布。たいていが紅色であったが、洗わなくても時が経つと褪色する。
- 73) ズボンは腰回りにゆとりがあって股から下は締まってタイト風。シャツの上から体にぴったりチョコッキを着た。
- 74) 15世紀の刀鍛冶。国王フェルナンドの剣を制作。現在、王室武器庫に保存されている。
- 75) ユダヤ教あるいはイスラム教からキリスト教に転宗した新参教徒は大玉の数珠を見せることで先祖を隠そうとしたといわれる。

- 76) ミサに詣ることを強調するのもユダヤやイスラムから転んだ新参教徒の先祖隠しの手口と見られていた。
- 77) 「アルコス伯爵」の爵位は、ラサロの時代、消滅して久しかったが、「アルコス公爵」が存在した。別に、歌物語に「クラロス伯爵」という人物が登場して、衣装が仰々しかったことで話題になっていたので、ラサロの連想にあらわれた可能性が濃い。いっぽう、「アルコス伯爵」には本書の盾持ちを連想させる特徴はないので、作者か清書筆耕人かの書き違いかと思われる。
- 78) トレド市の裕福な男たちは、昼を一緒にしたり、女色をもとめて川岸へ行き、女は、みな被り物をして男の誘いをまちうけたという。
- 79) 14世紀スペインの詩人。恋の誠を貫く男の代名詞。
- 80) 市場（広場）の八百屋でもらったキャベツの芯とおもわれる。現代のスペインでもキャベツの芯は粗食の代名詞の一つである。当時の文芸では、キャベツに限らず灌漑作物、野菜を食うことを強調すると隠れユダヤを暗示した。
- 81) ラサロの昔も今もスペインの昼食は通常2時に始まる。
- 82) 「待つ」は、隠れユダヤを念頭におけば「救世主を待つ」の意味にとれる。ラサロの時代、「こいつは待つのになれている」「まだ待っている」などの表現が、血筋の汚れをからかうのにつかわれた。「待っても無駄であった」と締めくくって揶揄の意図が完結する。
- 83) ラサロのいう「良い人たち」といって「金持ち」をさす。気前のいい大樹の陰に入るのがラサロの人生哲学であり、臓物屋のお姐さんもその一人である。
- 84) 「逆さに吊るされるよりは乞食するほうがよい」という諺もある。
- 85) 時計が四時を告げるまでにお貴いで得たパンの一部をラサロはすでに腹に入れている。それをおやつとして「おやつを食った上にまだそんなに食うのかと思われなくなかったので、食べたことは黙っていた」。諺に、「夕食をくわせる相手にはおやつをしっかりとらせておけ」というのがある。しっかりと食わせておけば、カネのかかる夕食を安くすませられるから」という根拠がある。ラサロは夜もしっかり食いたくておやつを食べていないといったのだ。大喰いはキリスト教七大罪の一である。
- 86) ここで言う犬は galgo ガルゴ種、グレイハウンド種。瘦身の兎狩犬。スペイン語で飢餓状態を「犬の食い気がある」という。ユダヤ、イスラムなどからキリスト教への改宗者を見下げてガルゴ犬とよんで卑しむこともあった。50年後にセルバンテスが書くドン・キホーテも瘦身の貧乏貴族で、瘦身のグレイハウンド種を飼っている。貧乏貴族を、瘦身のガルゴ犬に擬えることは、ラサロのころ、既に伝統であった。
- 87) 狼を自分が仕留めたかに思わせるため切り取った頭をもちまわってもて囃されること。ラサロの手柄をわがものにする。
- 88) 余所者の乞食稼業をゆるすと地元の乞食の貰いが減る。
- 89) 1546年4月21日、トレドで余所者乞食に対して、投獄、鞭打60発、追放という順序の処罰が下された。トレド史上、他に例がない。1544年には、大審院がおかれていたバジャドリッド（盾持ちの生地はその近郊）や、サラマンカ、サモラなどの都市でも、生地以外での乞食行為を禁じる一般法によって処罰が実行された。
- 90) トレド市はこの辻でいろいろな処刑をおこなった。その後のラサロに深く関わる場所。
- 91) この種のお針子さんは売春婦を兼ねていた。
- 92) 情を通わせる間柄にもなっていた、という意味も兼ねる。

- 93) 干葡萄 passa を思わせる語 pasado と passava が語呂を合わせて用いられ、干葡萄を常食としたイスラム教徒を連想させることから、お姐さん方もその血筋の者という暗示が読める。
- 94) 瘦身の犬。血統書で血筋を皮肉る。注 87 を参照。
- 95) 「武士は食わねど高楊枝」
- 96) 奥方と、奥方が雇った泣き女が泣いていた。
- 97) 「真っ暗で、気が滅入っちゃう家」というと現代のスペイン人の多くがラサロを思い浮かべる。
- 98) 借金取りが来るかと思った。
- 99) 「身の上を語ってくれた」という文句は当時流行の騎士物語の読者には馴染みのある表現であり、その読者が読む『ラサリージョ』は、乞食の身の上話にとどまらない。それは、出世して輝き崇められる騎士の生涯のパロディーに見える。『ラサリージョ』では泥棒の子が精一杯の出世を誇らしく語る。
- 100) 伯爵という爵位は、国王の身の回りの世話などをし出世の機会に恵まれた。
- 101) バジャドリード市の中心の一街区。金持ちやユダヤ人の多い地区。盾持ちがユダヤからの改宗者であることを暗示する。バジャドリードは、1517年には「ブラッセルほどの大きい都市」と旅人が書いている。本書の出版を1554として、その11年前に不動産価格の暴騰がはじまった。1557年、58年、59年とバジャドリードに都がおかれ、建築ラッシュがおきた。56年に禁書令が発令され、本書は59年に禁書となった。
- 102) この盾持ち escudero を最底辺とする貴族階級の特権の一つに「鳩の飼育権」があった。鳩は飛んでいった先にあるものを食し、餌を与えずとも育つので小屋のほかに元本がかからず高収入がえられた。卵や肉も売れたが、最大の収入は糞で、最高品質の肥料と評価されていた。バジャドリードでは1980年頃まで鳩の飼育が盛んであった。
- 103) 「貴族よ、イダルゴよ、郷里を出て、顔を知られていない土地へいけ」とロッテルダムのエラスムスは書いている (EMENTITA NOBILITAS)。伝承の笑話にもある：「イダルゴとは、七十里もむこうからの渡来人をいう」。
- 104) 司教を補佐する聖堂参事会員。聖職者とは限らない。トレドにあっては、スペイン中の教会を率いる大聖堂の司教を補佐する。任命は法皇が司教に委任。司教ではなく聖堂参事会が管理する教会があり、コレヒアータと称す。「大名暮らし」をスペイン語では「聖堂参事の暮らし」ともいう。
- 105) ラサロの時代、貴族の爵位は国王が授けた。1500年頃に絶対主義王制が確立するまでは貴族の高位者が授けた。騎士 caballero の叙任権も、同時期、騎士全般から国王に移った。直接の主人にたしてではなく国王への忠誠が第一義になる。
- 106) お針子で売春を兼ねる。
- 107) メルセ修道会は破戒僧の多いことで知られる。創設は1228年に創設された。おもに軍事にかかわり、イスラムの地に囚われたキリスト教徒軍人の身請けの仲介にもたずさわった。役目柄、色事の仲介にも長けて世俗に染まり、ラサロの時代、新大陸アメリカでの布教活動の怠慢を糾弾されたことがある。『ラサリージョ・デ・トルメス』は1554年に出た4種が現存最古であるがうち一種、アルカラ・デ・エナレス版は「メルセ会」の名を出していない。また、四種の全てが1559年、異端審問所によって禁書にされたが、1573年、当の異端審問所が、この章を削除した新版を出した。検閲官ロベス・デ・ベラスコの担当したこの本を後世は異端審問による「懲罰版」とよぶ。この修道士を近所のお姐さんが身内と呼ぶのは、売春の仲介者をお父さん、

お母さんと呼ぶ習慣による。間夫と情婦の間柄でもあって、この修道士は情婦のもとへ足まめに通ったので靴が早くすりきれた。「初めての靴」を「アダムとイブ」の着衣になぞらえ、ラサロが靴を履くようになったことを「女を知って偽善に染まり無邪気をうしなうことをほめかす」との説もある。

- 108) 違法売春をはたらく女の情人がヒモであることが多いが、そのヒモの陰に保護者を装う別の人物がいて、御上に垂れ込まないという条件で女やヒモを強請っていた。上納金を徴収したのである。ラサロを雇った修道士も陰の保護者のようで、集金のためにも色街を駆けめぐり靴をはきつぶした。靴を履き潰すことには女を相手に奮闘することが重なっている。
- 109) 免罪符は、キリスト教信者が告解師を選ぶ自由を授けたり、四旬節や復活祭の齋食、聖職者の職務日課を免除するお礼である。その赦免贖宥を発行するのは、ローマ法皇であり、国王が販売したが、その売上金は、スペインでは、中世後期から、イスラム支配下の旧領土を奪回するための戦費に向けられた。しかし、ラサロの時代には、いずれのためでもなく、たとえば、スペイン国王カルロスI世（神聖ローマ帝国皇帝カルロスV）は、ウイーンに迫るイスラム勢力を払うために、ローマ法皇に免罪符の発行を要請し、信者には購入を強制した。そこからも推して、免罪符は一種の金納税に相当するにいたり、その徴収のために国家と教会は特別の機関をもうけ、権利を業者に譲渡し、売り上げ予想額を前金で受け取ったので、販売業者は販売促進のためには手段をえらばなくなった。たとえば説教専門僧を売り上げの歩合制で雇い、信者に免罪符を買うよう折伏させたのである。修道士は、免罪符を売るかぎり修道生活を免じられていたので、やがては流浪の詐欺師に変貌することもめずらしくなかった。その現実にてらせば、本章の免罪符売りは、第四章の、勤行が嫌いで修道院での食事も嫌うというメルセ修道会士に近く、売り上げの歩合で実入りが上下するので、買おうとしない信者に「教会から破門する」とゆすりに出ることもあった。この押し売り行為と聖職者の買収を国会も世論も強くのがめたが、ラサロの時代、戦費の増大に歯止めがきかず、トレドで開かれた国会は免罪符の紹介と販売の場に信者が出席することを義務づけた。
- 110) 免罪符の価格、一律2リアル。兵士の日当が5リアル。
- 111) トレドの町の北西15キロ-40キロの地域。
- 112) 免罪符販売人は、通常、巡查1名を伴い、これが、購入を拒む反抗的な信者を罰した。
- 113) 夕食後、就寝前、飲み物といっしょに果物の糖蜜漬けを食す習慣があった。その費用を誰がもつかを賭事で決めることも多かった。
- 114) 十字軍免罪符統括署長がいて、その監督下に、司教区ごと、免罪符の発行と販売を管理する署長がいた。ラサロを雇っているのは免罪符を売って歩合制で手数料をとる販売員にすぎないがラサロはこれを署長としている。
- 115) 錫杖は権威や職権の象徴。これを手から離すことで、権柄尽くではないことを示す。
- 116) 免罪符売りが要請する「試し」はモーゼが不信心者をこらしめるために要請した「試し」の模倣である。「しかし、主が新しいことをされ、地が口を開いてこれらの人々と、それに属する者とをことごとくのみつくして、生きながら陰府に下らせるならば、あなたがたはこれらのひとびとが主を侮ったのであることを知らねばならない」（民数記、16-30）。他にも、つぎのような聖書の文句に倣った文句がつかっている。「祈りを聴かれる方よ、全ての肉なるものは罪のゆえにあなたに来る」（詩編、65-2）、「神には何でも出来ないことはありません」（ルカ、1-37）、「それはわれわれの知ったことか、自分で始末するがよい」（マタイ、27-4）、「私は悪

- 人の死を喜ばない。むしろ、悪人がその道を離れて生きるのをよろこぶ」(エゼキエル、33-11)、「悪をもって悪にむくいず、悪口をもって悪口にむくいず、かえって、祝福をもって報いなさい」(ペテロ、3-9)
- 117) 牝驢馬が牡馬と紛う強烈な蹴りを放つことがある。
- 118) 聖母の名を喚び、全聖人の名を abc 順に挙げて、その法力に依って神に祈願する。
- 119) 詐欺と知りつつ黙っていた罪。免罪符売りの助手は親方の不正を黙ることを学ぶ。セルバンテスの短編小説『リンコネテとコルタディジョ』のリンコネテの父親は免罪符売りで、この父から言葉を学んだという。
- 120) 詐欺師・如何様師の類いか。塗装職人は弟子を連れていた。これが色粉を石臼で挽き混ぜて作業を手伝う。諺に「太鼓の色を塗って大儲け」がある。
- 121) 教会の入り口の階段を上に行くほど乞食間の身分は高い。ラサロは、小さい教会の階段の一番下の地面で物乞いをする身分から出世した。キリスト教世界を代表するトレドの大寺院の、しかも、階段を上り寺院の中に入ったところで下男以上の職をえた。ラサロは、いまや、血筋の怪しい武家が血筋を誇示してこもった大寺院で、それに関わる身分に昇ったのである。
- 122)
- 123) 34 マラベディ = 1 レアル。
- 124) 木綿生地で、片面が毛羽立っている。ネル。
- 125) 先に盾持ちが説いた「みかけの大切」をラサロは批判したはずだが、ここでは、実践にまわって背伸びしている。
- 126) 水売りは、たいていがイスラムからの改宗者の血筋のもので、もっとも卑賤な職にかぞえられていた。それでも成り手が多く、競争がはげしかったので、低賃金でやとわれた。その現実にはラサロの雇用条件から推して知れよう、「四年働いて古着一式を調えた」のである。ラサロを雇った僧侶は教会の掟に違反している。僧侶は商業活動に従事してはならないのである。土曜日の売り上げを全てラサロにとらせたのはユダヤの祭日を守ったからであろう。そこから、この僧がユダヤ教からキリスト教への転宗者で商いに聡いと暗示も感じとれる。ラサロが蓄えを古着に当てたのは、当時の流行になったこととおもわれる。下賤の労働者大衆は、貴族や騎士や大金持ちと肩をならべられる服を、古着で、手に入れたのだ。当時のスペインでは、平民にも帯刀がゆるぎされていた。先に仕えた武家の虚栄をラサロも帯びることになったのだ。古着商も多くがユダヤ教からキリスト教に転んだ血筋であった。
- 127) 容疑者の逮捕を、町村長が巡査に命じ、巡査が捕り方に捕縛させ、書記が容疑者から供述をとる。
- 128) 警察の手を逃れて治外法権のある教会へ避難し保護されている犯罪者が外であらたに騒動をおこせば、これを教会から追い出す法律があった。
- 129) ユダヤ教徒が、救世主を待った、ことを暗示している。
- 130) 国家公務員。ルイ十四世が『朕は国家なり』といった。その朕、絶対主義体制国家の国王の役人は国家公務員。
- 131) この一節は、この作品の中で最も大胆とされてきた。異端審問による 1573 年の『懲罰版』で削除され、以後、スペインでは異端審問廃止の 1834 年まで 1554 年版を継いだ版は出たことがない。
- 132) 神に添えてあなた様と書くのは当時の書簡での常套。

- 133) 人が毛嫌いする触れ歩き。
- 134) 水売りよりも卑しく、社会的評価のどん底の職。ラサロは、声が通りやすいことも、酒と相性もいいことも、盲人の手引き小僧をしていたころから意識できた。当時、競売の触れ役は、1000 マラベディの売り上げに対して 30 マラベディが触れ役にいった。刑の執行の触れ役の日当は 2 マラベディ。
- 135) トレド大寺院の司教区に属する司教会の主席司祭はワインだけでなく農牧畜業で高収入をえていた。
- 136) 判じ物のような頂戴物だ。解説すれば、小麦一荷は精液（種）の充填をさし、聖餐のワインを意味する。自身のお肉は陽物をさし、聖餐のパンを意味する。イエスの血と肉の替わりである。丸いパン一対は睾丸をさし、ズボンのお下がり「穿く」から情交を暗示する。
- 137) 聖職者が自宅に夫婦を住ませることは教会が禁じていた。そこで隣に住ませたとみえる。
- 138) 当時の法では、妻の不倫は、夫が妻の売春を容認し同意した、として罪を問われることがあり、有罪ならガレラ船で 10 年の漕刑ときまっていた。このラサロの書簡はその疑惑に対する自身の弁明である。現代スペインの映画監督フェルナンド・フェルナン・ゴメスの『ラサリジョ・デ・トルメス』では、ラサロが書簡ではなく法廷で弁明する。
- 139) ラサロがラサロ・デ・トルメスとフルネームでよばれるのはこれが初めて。司祭が威厳を強調しているのか、ラサロを一廉の者として扱ってのゆえか。
- 140) 婦女の面前で下品下劣なことを言うべからず、と当時の都市上流階層は教えていた。いまや上流気取りのラサロはこの行儀を欠かさない。
- 141) ペテロが「自分だけは決して躓かない」と言い張ると、イエスは、「今夜、鶏がなくまでにあなたは三度、私を知らないというだろう」と告げた *マタイ福音書, 26, 34。
- 142) 「いとしの妻よ、誓わなくとも、おれはおまえを信じている」という諺がある。
- 143) 背景に、トレドの女は、皆、売女の、あばずれとみなす風潮がある。「トレドの女は嫁にするな、売女か孕みをつかまされる」という諺がある。
- 144) 「不貞をはたらいた妻の涙を口づけで拭ってやる不幸な夫を世間は寝取られたのを知りながら黙っているとか何だかんだかまびすしいが、嫉妬で憔悴したあげく悲劇を招くよりこのように騙されたふりをしているほうがよいのではないか」(エラスムス『痴愚神礼讃』)。
- 145) 国会の開催地は事情に応じて転々と移された。当時、トレドでは、1525 年と 38 年に開かれている。25 年は、その 5 年前に自治をめぐる国王に歯向かった市と国王の和解の年。どちらも盛大な祝儀で賑わったにちがいないが、25 年頃、皇帝カルロス V 世には、ヨーロッパの戦で常勝の勢いがあつた。出版物が、年それぞれの印象深い出来事を伝えて執筆時期を示す習わしがあつたことから、この国会を 25 年のこととすると、本の執筆と出版をその頃とみなせるが、38 年の国会としてもよい言及があり、様々な出来事が符合しないので、この本の執筆と出版の時期はいまのところ確定できない。現存最古は 1554 年版である。